阿部定の精神分析的診斷

東京精神分析學研究所編

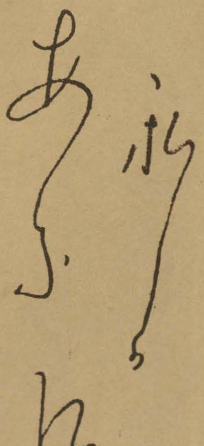
PSYCHOANALYTISCHE STUDIEN ÜBER EINEN FALL (SADA ABE) VON SALOME-KOMPLEX,

Verfasst vom Tokio Institut für Psychoanalyse, 1937



東京精神分析學研究所出版部發行





阿部定とその筆蹟

東京精神分析學研究所編

阿部定の精神分析的診斷

東京精神分析學研究所出版部

序

　昭和十一年度の日本社會に一大センセイションを捲起した怪奇殺人犯人阿部定の心理に就いては、或は病的と云ひ、或は變質と云ひ、種々の論議はあつたが、何れも大體に於いて常識的見解を出でず、さらに科學的診斷の名に價するものは少なかつたやうに思はれる。それは一つには、かゝる性心理、かゝる女性心理は、精神分析的方法以外の方法にてはこれを研究するに不十分又は不適當であるがためであつたと我等は確信してゐる。

　左樣、ひとり精神分析學のみが妥當な解釋と闡明とをこの犯罪者の心理に就いて下すことが出來るのである。それは必ずしも豪語でもなければ僭越の言でもない。それは自然科學の諸分科の必然的結果を當然の事として語つてゐるに過ぎない。

　何れにもせよ、阿部定の心理は確に異常ではあるが決して病的ではなく、普通人の心理と無關係ではないと云ふ結論に我等は達してゐる。我等は人間、殊に女性の性心理の戯畫化を、誇張化を、極端化を、或は原始形態をそこに見るに過ぎないと認める。萬人はまづこの一女性の

心理を何等の偏見なく、憎惡なく、讃美もなく、ありのまゝに、學的に正確に、認識せんことを要望せねばならない。それは實に正常者の自分自身への警戒であり、教育であり、準備であると云はねばならない。

終りに臨み、本書編纂のために種々貴重の材料を貸與せられた東京朝日新聞社週刊朝日編輯部、中央公論社婦人公論編輯部の好意をこゝに深く感謝しておきたい。

昭和十一年十二月

編者識

『阿部定の精神分析的診斷』目次

編者序文

目次

本文

本論・分析診斷

法醫學から觀る……金子準二（四）

阿部定の精神分析……長崎文治（一〇）

お定の無意識動機に就いて……高橋鐵（二八）

阿部定の定イズム雜考……高橋鐵（四三）

戒心すべき誰にでもある傾向……諸岡存（五九）

愛慾葛藤問題としてのお定事件……大槻憲二（六七）

お定型犯罪事件の流行……大槻憲二（八三）

附録・參考記錄

小　序……（九〇）
幼少時代……（九〇）
小學校時代……（九八）
不良少女時代……（一〇三）
事件の時間的表示……（一二〇）
參考文獻表……（一二二）

圖　版

『サロメ』（ワイルド詩篇へのビアヅリの挿圖）……（表紙）
阿部定の肖像及び筆蹟……（見返）

（目次終）

阿部定の精神分析的診斷

本論　分析診斷

法醫學から觀たお定の型

警視廳技師
東京精神分析學研究所客員　金子準二

型のいろいろ

變態性慾は大體次の四つに分けることが出來るが、血文字お定は完全にこの四ツを兼ね備へてゐるからオソロシイ。また犧牲者も完全な變態性慾者で、この恰好の取合せがあつて初めて、あの奇拔な未曾有の事件が比較的簡單に遂行されたのである。

（A）**サディズム**　フランスの侯爵サドの異常性慾から名付けられたもので、異性をいぢめて快感を感ずるもの。普通の愛撫では物足りなくて相手を毆る、打つ、つめる、刃物を揮つて切る、突く、果ては殺したり、殺した揚句に切取つたりなどするもので、お定の犯行はサディズムの現れである。これが更にひどくなると食人症、屍姦症になる、これがサディズムの極致で

あるから、お定の場合は一歩手前であるわけだ。

(B)**マゾヒズム**　オーストリアの大尉マゾッホから出たもので、サディズムとは反對に受身型で異性からいぢめられて喜ぶ型。今回の哀れな犠牲者吉藏は典型的なマゾヒズムの例である。死の前日お定に細紐で首をしめられ、眼球が飛び出すまでの目に會ひながら別段抵抗もしなかつたらしく、お定が外出中、(資生堂へ藥を買ひに行つた)便々として待合に居殘り、更に最後の瞬間も「今度、締めたら、ゆるめないでくれ」(お定の自白による)といつて、むしろ陶醉してゐたかのやうに見えるのは、この心理を物語るものである。お定の場合は犯行後、當局の目を晦すため盛んにアヂトを變へたり、變裝したりしてゐるが、これは普通のお尋ね者のやうに一途に逃げたいといふ心理ばかりでなく、多分に逃避行を愉しんでゐる形跡がある。自分を衆人環視の花形役者のやうに思つて『お定變化』を演じて喜んでゐる。自分は生命よりも大切なものを持つてゐる。もうこれであの人を獨占して滿足だ、しかし捕まるのはあまり好ましくもないから、ともかく逃げて見せうといつた態度だから、捕まつても惡びれたところがなくシャア〳〵と死刑を恐れないといふ。彼女の場合は恐らく刑法の力で死刑になるとは思つて

ゐない、殺した吉さんのために自分は殺される、そして自分は滿足だと思ふ、かうなると彼女は立派なマゾでもある。

(C)**性的崇拜症**　これは二種類ある。性的に關係あるもの、肌につくもの、その他ハンカチ、櫛、手袋、下駄など直接身體に觸るものを集めて喜んでゐるもの、第二は性を代表するもの、たとへば毛髮小指などを切つたり、遂には今回のやうに切取つて滿足するもの、お定はこの型にもあてはまる。

(D)**性的淫亂性**(女性の場合は**ニンフォマニア**)　所謂精力絶倫で決して一人の愛人では滿足出來ない、次々と異性に接近せねば蟲が納まらぬものである。お定の場合でも、愛人の形見を抱きながら、さらに校長にあつたり、若い按摩に變なそぶりをしたりしたのはこの適例である。

(F)**色情夙發症**　初經前に異性の交渉を持つやうになつたりしてゐる點から見て、色情の發動が變態的に早期に於いてであると云はねばならない。

以上、證明した通り、お定はこの五つの型を一身に兼備した典型でもある。前年、阪神地方に騷がれた事件に「首預け」車次事件といふのがあつた。女形役者が同性愛の仲間を殺し、そ

の首を切り取つて大切に藏つて置いた事件である。シャジといひサダといひサド侯爵の親類みたいな名前の持主で東西共通の因緣を感ずる。

犯行の動機は

事件直後、自分はお定の犯行の動機について大體次のやうな意見を述べた。その動機解決の鍵は、持つて行つた包の處分法如何にあると述べておいた。卽ち

(1)大切に包を持つてゐたら性的崇拜症

(2)便所などに捨てゝしまつたら單なる復讐か嫉妬の顯はれ。コマ切りにしたり、針で刺したりなどしたら、その程度の甚だしいもの。

(3)もしも他の男にそれを見せて「これこの通りで御座んすわいなア」といつたらその男への心中立。

であつて、彼女の場合は想像の如く包を大切に持つてゐたのだから、前述の性的崇拜症の顯れである。

なにが彼女を

お定がこんな犯行を敢てするまでになつたのは後天的な環境の罪か、彼女自身の先天的素因にあるか。恐らくこの兩者を合したものと思はれるが、その比率は先天的素因の方が重いと思ふ。かうした素因を持つてゐた彼女が後天的に藝妓、酌婦、淫賣婦、娼妓などといふ肉體的な商賣を轉々したのだから、ます〳〵磨きがかゝつて典型的な變質者になつてしまつたのだ。

今から十五六年前、下谷にマゾの殺人事件があつた。これはマゾの細君に攻め立てられたり、はじめは普通だつた夫がだん〳〵深味にはまり「人殺しッ」だとか「殺してッ」とか二六時中いはれるものだから、遂にフラ〳〵と細君を殺してしまつたのである。普通の人間でも、こんな工合だからお定のやうな素質のあるものは一層である。普通の人間の常識でいふとても堪へられぬやうな人肉の市にゐて案外平氣で、しかもその生活を愉んでゐるやうな女を往々見受けることがある、これは一種の適所適存で、大體ニンフォマニアの連中がこの泥海に殘るのである。また男の連中でも好んで、かゝる場所に出沒するものは一種のエロトマニアなのであ

る。またマゾとかサヂとかいふと、ゾッとする人があるが案外、普通の人間も輕度のものは誰でも持ち合してゐるものである。女給や藝妓に、太股を抓られて悦に入るのはマゾで、何でもないことにすぐフンガイして横ッ面などを張つて喜ぶのはサヂである。そして女に貰つたハンカチを後生大事に持つてゐるのはエロである。かう言へば思ひ當る人が多からう、またこのことが「罪をにくんで人をにくまず」といふ美徳を、定に持つてゐる要素となつてゐるのだ。

阿部さだの心理分析

東京精神分析學研究所員　長崎文治

性感と愛情

愛情が肉體的でなく、專ら精神的である（假りにそれが可能として）場合は極めて不安定である。精神的愛（プラトニツクラブ）は理念の上に於てのみ存立するが、實際問題として、尠くとも人間が性感を有する以上、又愛情の職能が人間同志の結合に仕へてゐる限り、肉體的交渉を條件としない愛情は存續する可能性が無い。これは人間社會に於ける愛情の一般的な規準であつて、愛情は肉體の上に印刻される事によつて安定するものである。そして性感の濃さが愛情の深さを規定するといふ事は、最初愛情の交換から出發しなかつた夫婦が、性生活に入るに從つて、殊にそれから得る所の快感の量に依つて愛情が萠して來てはなれ難たくなる事、又これと反對に結婚前に

熱烈な戀愛を持つて結ばれた人達が、性生活の不滿の爲めにはかなく結婚解消の憂目を見るといふ例、或は肉慾を否定して聖き愛の世界にのみ生きやうとして雄々しくも手を取り合つた人達の味はふ内面的な苦悶等、かういふ例は世間に幾らも見られる事柄である。唯、この性感を精神的に迄高めるか、或は永久に肉體の上に停滯させて置くかによつて、愛情の性質に異りが生ずる。

過去に於て幾人かの男性と性的交渉を持ち、性感情を精神的にまで高める所の素質と教養とに缺けてゐたさだの愛情が、專ら肉慾的となるのは當然である。愛情が肉慾的となる時それは容易に極端となる。何となれば、愛情は云はゞ肉體的エネルギーの半ば昇華したもので、そこに昇華の作用を缺けば、それは勢、生の形で發動することになるからである。缺乏と豐滿とは肉體的欲求の兩極であつて、この意味に於て肉體的欲求には一定の限度がある。愛情の無限なる欲求を、有限に肉體的滿足に轉化させる事は到底不可能である。そこで餘剩のエネルギーは――吾々はこれをリビドーと呼ぶ――これを抑壓したり、純化して行くのが常態（ノルマル）な生活であるが、さだの樣に、愛情をひたすら肉體の上だけで滿足する事より外知らない場合は、勢ひその

満足を異常な方面に發展（或は移行と云つた方がよいかも知れぬ）させなければならない。それ故、彼女の野生的な愛情と貪婪な性慾――（愛情を肉體の上で消化させやうとする爲めの）――とは、彼女を驅つて容易に人間性の範圍を越えて、野蠻な、極端な行動をとらしめるに至るものである。彼女の情痴に浸つてゐた待合の女中が、「到底人間同志とは思はれない」と彼女等の情痴生活を評したといふが、一體性生活そのものが一種の退行現象で、人間にあつては、知性を未開野蠻な、更にそれ以上動物的な段階にまで引下げるものであるから、自づと精神内にも、今迄社會とか道德などの名義の下に抑壓されてゐた野生的分子――原始的感情――が跋扈し始めるのである。

愛と苦痛

愛の祕戯がどれ程多くの殘虐性を孕んでゐるかは、今更說明する必要もない。愛と苦痛とは恰も影の形に添ふ如く常に並行してゐるもので、性的のクライマックスには必ず或種の苦痛が隨伴するし、總ての人間は程度の差こそあれ、苦痛を與へ、又は苦痛を與へられて快感を催ほ

す虐待性(サディスムス)又は被虐性(マゾヒスムス)的傾向を持つてゐる。唯これが、性的快感の高潮時には強く現はれて來るだけである。併し乍ら、この場合は全く本能的なもので、動物的表現の一つの原型、例へば多くの動物の交尾中とか又は交尾後にみられる咬みつきといふ様な行動として現はれて來る。而して男性の性的快感は短時間の中に經過するに反して、女性のそれは極めて緩漫であるから、自らそこへ蘇つて來る野生的感情の繼續期等も長い譯である。この緩漫に經過する女性の性感動の中へ次第に知性が蘇つて來る過程を、人類の進化史的過程に擬らへる事が出來ると云はれてゐる。これは個體の生長史は種族發達史の縮圖であるといふ約說原理に從つて、女性の性感動の開發期、卽ち女性の性的最高潮時の無意識的行動から、次第に現實感を取戻して來る過程は、人智の發達過程と全く類似してゐると說く事である。この立場からして、人類の未開時代に相應する性感動の開發期中の、未だ分化されない叡知の段階に於ては、文明人にも屢々野生的行動が現はれて來る。さだのあの犯行も、恐らくはこの段階の產物で、愛するが故に、それを自分の內に取込まうとする意欲の野生的な現はれであると見なすことが許されよう。

獨占の原型

獨占慾は、相手を完全に自分の中に取込んで（攝取）これを自體の一部分たらしめやうとする事（自己化、廣くは同一化といふ）で、言ひ換へれば、「喰つて了ふ」といふ事である。一體喰ふ者と喰はれる者との關係——攝取と提供との關係——は生物の活動の原型であつて、吾々はこれを生の本能と死の本能と呼んで、總ての本能現象を說明せんとしてゐる。この喰ふ事と喰はれる事とが過不及なく行はれゝば、そこに完全なる結合が生ずるのである。これが動物にあつては生殖と云はれ、一方の生殖細胞が、他方の性を異にする生殖細胞を受容する事によつて生殖作用が遂行されるのである。同性の極は相斥け異性の極は相牽くといふ一般的法則は、それ故生殖作用にも當て篏り、これが精神的の領域に入つては愛情に迄發展する。そこで、愛情の機制を嚴密に規定すれば、攝取と提供とが完全に行はれて獨占的欲求が充足せられた時、相手を永く自分の手許に引留めて置かうとする欲求によつて生ずるものである。であるから、愛情の原型は喰ふことであつて、これを動物的にみれば相手の生を奪ふといふ事になる。嘗て首狩人種と云はれた臺灣の生蕃人が、最も厚い信賴と愛情を寄せてゐた牧師の歸國に臨んで、

惜別の極、遂にその首を取つて了はうとしたといふ實話があつたが、これは決して特種の行動ではなく、文明人にさへ愛の極致には屡々現はれて來る感情であつて、交尾中、雌が雄を喰つて了ふといふ蟷螂や或種の蜘蛛の行動と、人間や彼の高等動物にも行はれる愛の表現としての咬みつきとは同一のものである。畢竟、「愛と死とは紙一重だ」といふ言葉が、生物界の通則として人間にも當て篏つてゐる。

獨占慾が充されぬ場合

兎に角、獨占慾は彼我の完全なる一致を目指して生ずるものであるから、愛の對象を完全にそして永久に自分の物として了はうとする要求は常に誰にも存在するもので、この要求が强ければ强い程、素朴的な形で現はれて來るし、又その要求が滿され得ない樣な條件に遭遇すれば、强引に、そして屡々異常な方法を以て、彼の獨占的欲求の滿足を計らうとする。この場合の精神は勿論異常である。正常な人間は社會的な規格に從つて、これを抑壓し、又は代償的行爲を以て滿足を移行させ、或は他の方面に純化（サブリメート）させる事が出來るが、若し、何等かの不良な

條件によつて、精神的に退行を來してゐる樣な場合には、獨占慾は洗練されない、野蠻な行動として現はれて來る。さだの場合をみても、被害者たる石田吉藏は、彼女がひたむきに寄せて來る愛情を進んで、全面的に受容れる事が出來なかつたといふし、彼に妻子があるといふ立場や、彼が幾人かの妾を有してゐたり、絕えず女から女へ移つて享樂してゐる樣なドンファン的性格の持主であつた事とか、今迄二人だけの世界では完全に自分の獨占に任ねてゐたと思つてゐた吉藏の心の端に、思ひがけなく里心がついてゐる事を知つた時の落膽、その他、男性と女性との性的感情の不一致等が、さだの獨占的感情に一抹の不安を與へたのであらう。これが結局、男を殺して、全く意志の無いものとして、完全に獨占しやうとする原始的感情を一段とそゝり立てたものであらう。そして、この感情を實行にまで移したのは、勿論さだ自身の性格とか境遇によつて培はれた執拗な情慾から生ずる加虐的心理ではあるが、それの口火となつたのは明らかに吉藏自身の被虐的性格にあると思はれる。さだの告白によれば、或時にはさだが吉藏の上に馬乘りになつて咽喉を縊し乍ら短刀をさしつけた場合、驚ろくかと思ひの外却つて滿足相にニヤリと笑つたといふし、彼と關係のあつた幾人かの女性を取調べた結果によつても、

彼の被虐性性格を裏書する樣な陳述があつたといふ事である。又待合の女中の話にも、吉藏はさだの愛撫を全く幼兒の樣に受けてゐたといふし、彼等の關係は母子間の樣な立場であつたといふ事である。一體、母親が子供を愛するのは、子が母の自由になり、その獨占欲を滿足させてゐる時にである。母親の無限な愛撫は屢々度を外して子供の不機嫌を買ふもので、その行爲は第三者から見れば可成り殘虐性に富んでゐる。「喰つて了ひ度い程可愛い」との一般的な愛撫の言葉が、さだの場合には、「どうしやう」「殺して了ひ度い」といふ痴話となり、性戲の間の模擬的殺害行爲となり、最後にかりそめのたわむれが眞實となつて、あゝいふ結果を來したのであらう。

　彼女等の情痴生活から推察すれば、さだが吉藏の首を締めたとき、呼吸困難――呼吸逼息に伴ふ一種の快感から、吉藏が恍惚とした狀態になつて、思はず漏した言葉とか、滿足氣な表情とかゞ、彼女の殺害に附隨してゐた現實意識の抑制力を痲痺させて了つて、却つて加虐性性格者たるさだの心に殘忍なる快感を喚起して、遂に殺害行動に迨導いたものであらう。虐待と殺害とは殆んど僅かな隔たりしかない。子供が動物虐めをしてゐる場合、最後に無意識的に手の

力がこもつて殺して了ふ事がよくあるが、さだ等の情痴生活には既に殺害的行動に赴くべき好條件が揃つてゐたのである。そして一般に加虐性々格者にみられる所の、殺害後に湧上つて來る快感は、更にその犯行に着色を行ふものである。さだが吉藏を殺してから後過した數時間の行爲は、變態性慾者の殺人後に行ふ弄屍行動が、總て奔放なる性慾に仕へてゐるのと軌を同じふする。

情死象徴としての血書

さだの犯行は殺害といふ形式をとつてはゐるが、眞實の意味では情死である。これはさだが吉藏を殺した後の所作をみれば分る事であつて、彼等の情痴生活の溫床として、最も印象の深い、情慾をそゝる所の敷布に、「定吉二人きり」と血を以て書いてゐるが、一體寢床は休息とか安眠といふ樣な、生活々動の退避所であつて、精神分析學的に云へば胎内復歸願望——死の本能——の充足地帶である。それ故、これに「死の床」といふ概念を持つて來ると、こゝはさだと吉藏が永久に眠る墓場、又は一蓮托生の場所であるといふ意味を持つことゝなる。大槻氏は

この血書「定吉」と云ふ名を以て、二人の間に出來た子供といふ意味に解してゐるが、之れも背かれる事で、個體保存は結局種族保存に仕へるといふ生物學的鐵則から行けば、さだと吉藏の二つの個體は死んで、それが固く結合した所の一つの個體、卽ち子供が出來たといふ事になるのである。蓋し、兩親の性的關係に依つて結合した二つの生殖細胞は、各々の個性を新らしい個體の中に一つのものとして生れ代らせてゐるのであるから、種族保存の機制には死と生の本能が、各々その職能を以て奉仕してゐると見られるのであるから、生と死とは啻に生活機能の兩極端に立つのみならず、同時に融合する事が出來るものである。――（これはフロイドの「快不快原則を越えて」の中に詳說してある。この書は精神分析學の理論を述べたものであるが、同時に本能觀の究極を指標するものである）。

又死骸の左股に「定吉」と二人の名前を並べて書いたのも、その肉體が吉藏とさだの物で他のものでもないといふ事を表示し、こゝで二人が永久に結ばれて死んでゐるといふ事を象徵するもので、一面それは吉藏の妻に對する抗議とみる事が出來る。

更に、死骸の左腕に自分の名「定」だけを刻みつけておいたのも。彼女のひたすらなる獨占

慾を表はしたもので、昔から行はれてゐるところの「心中立て」の意味で「〇〇命」などゝ戀愛の相手の名前を刻んでおく入墨の意味を持たせてゐるものである。

勿論さだはこんな事をはつきり意識して行つたのではなく、一つの情熱に乘つて行つたものであらうが、人間の無意識的行動が彼の本心の非常に正確な表白者であるといふ點に於て、さだの行つた行爲の意義が認められる譯である。

さて、斯樣にして、以上の樣な象徵的行爲を行ふ事によつて、吉藏はさだの物となり、さだも亦吉藏のものとなつて完全に二人は結びついて、二人だけの世界に入る事が出來た（情死）といふ事を示し、その爲めにさだは一般の殺人者、又は情死片割者の持つ樣な死者の幻影とか罪障感に惱まされる事もなく、平然として、寧ろ滿足氣に大道を濶步し、司直の追求を少しも介意しないものゝ樣であつた。そして彼女の逮捕されてから後の言動も、極めて人を喰つたもので、平然として殺害の情況を自白し、自分の犯した罪を少しも心に懸けてゐないで、寧ろ當然の事を當然行つたものゝ如く考へてゐたらしい。これはさだの心はあの事件を契機として、義理とか人情などゝいふ五月蠅浮世の枷から離れ、罪とか罰などゝいふ恐ろしい現實意識の束

縛からも脱して、自由氣まゝな世界――非現實的意識、卽ち夢幻の世界――に入りこんで了つたからである。言ひ換へれば、さだは吉藏と二人で情死して、あの世で生活してゐるといふ樣な精神狀態にあるのである。

精神病學者は、彼女を變質者といふ言葉を以て一概に片附けて了つてゐるが、その奧底には必ずしも變質ならぬ複雜な心理が潛んでゐる。彼女の犯行前と犯行後の精神的過程を比較して推定するならば、彼女の心理が常人と餘り變らないことが認められ、彼女の以上の樣な象徵的行爲が人類普遍的であることが分るであらう。

局所切りの眞意義

さだが何故吉藏の局所を切り取つて、之れを御生大事と持ち歩いたか、そしてそれに對して異常に執着したかといふ事に就いて或學者は、これを節片淫亂症（フェティシズムス）といふ名前を以て呼んで、異性の身に着いてゐた品物を取つて來て、これを嗅いだり眺めたりして性的興奮を味はふものと同一であるとし、さだを變態性慾者に片づけて了はうとしてゐるが、さだの全貌から見て之の

説明は當てはまらない様に思はれる。又、道樂に依つて人生の裏通りを知り盡した或る通人は性感動の機徴を説いて、吉藏の局部に對するさだの執着は絶對的なものであると説明して呉れたが、これも、その道の人には充分了解の出來るうがつた見方である。併し私はその外に尙ほ他の意味が含まれてゐることを、これについてさだが係官に述べたといふ言葉から推察する事が出來る。彼女は吉藏を「おかみさんに渡し度くは無かつた」と云つてゐるが、死んで最早何の用にも立たなくた吉藏を、その妻の手に任ねる事を尙ほ嫌つてゐた彼女が、男の體全部でなく、その局部だけを切り取つて、後は御自由にといふ様な態度に出たのは面白い事である。

私はこの一見して矛盾した様な彼女の行爲の中に、次の如き條理の通つた心理機制を認める事が出來る。彼女は吉藏の屍骸を自分で處理する事が出來ない。出來る事なら自分の手で誰の手も觸れさせずに吉藏を厚く葬むつて了ひ度いが、それは到底不可能であることを知つて「妾の可愛い吉さん」をその妻の手に渡すのではなく、言ひ換へれば吉藏を男としてその妻に渡すのは彼女の獨占慾が許さない所であるから、去勢して、夫としての用に立たなくなつた、一個の人形にして渡す事に安心を見出したのである。そして彼女は、「妾の吉さん」即ち男性として

の吉藏を、切り取つた局部を固く抱いてゐる事によつて永久に獨占してゐるのである。端的に云へば、彼女の心理は、肉だけしやぶつて皮を殘す貪慾家のそれと同じであるが、一方又これは夫の片身を抱いて永久に操を立て通す貞婦の心情とも一脈共通してゐると云ひ得べきである。更にもう一つの解釋は、俗間で一般に男性々器を「倅」といふ代名詞で呼んでゐる所から、さだは吉藏の局部を、吉藏と自分との間に出來た子供、即ち遺兒（ワスレガタミ）として愛着を持つてゐたといふ事である。勿論、片身とか遺兒（ワスレガダミ）といふものは相手に同一化されたものであるから、畢竟意味は同一のものである。

總てこれ等は、無意識の象徴として、その意義を解釋してゐるのであつて、そこにこそその眞實の意義があると我等は確信してゐる。

サロメとの比較

愛する者を獨占する爲めに、之れを殺してその局部を切り取り、後生大切と持ち歩いたさだの行爲と、容れられない愛を執拗に遂げやうとして、相手を殺してその首を取り、之れに狂熱

的な接吻を與へたサロメの行爲とは極めて類似してゐることは一般に認められてゐる。併しこれが同一機制の異つた現はれであり、その異つた形式の同一性を論證した者はまだ無い樣であるから、それをこゝで簡單に述べてみやうと思ふ。

一體、首と性器とは無意識心理では同一のものである。首を性器の代理として用ひてゐる事は、古代の民族藝術の中に看取されるし、多くの民俗習慣の中からも發見出來る。精神分析學は又、この證明を人間の精神の領域に見出したのである。即ちフロイドは、赤面恐怖の患者を分析觀察する事によつて、赤面は性器の充血の代償作用であつて、彼は斯樣な機制を「下方より上方への移動」と稱してゐる。

思春期の男女は最もよく赤面するが、これは生理的に來た場合即ち性器の成熟して來た結果そこに過敏性充血を起す樣になり、これが抑壓によつて顏面の代償性充血となつて來る。性的經驗を積むに從つて、所謂「厚顏無恥」になるのは、性器の過敏性と顏面の代償性が少なくなつて來て、之れ等を連結支配する所の間腦の植物性神經中樞の情緒に及ぼす影響が薄くなつたからである。即ち性的經驗を持つ樣になれば、性器に生じた充血、(勿論性慾といふ狀態で現は

れて來る）を性器自身で解消する事が出來るから、抑壓機制の無い限り赤面によつて代償される必要は比較的少くなるわけである。勿論赤面癖心理機制はもつと複雜であるが、とに角、これによつて性器と顔面との密接な關係が了解出來るのである。

肉體がその本能に仕へる樞要なる部分は口と性器である。勿論、口は食慾を滿す爲めの器關であり、性器は生殖遂行の器關である。食慾と性慾とは個體保存と種族保存の二大本能の表現である。そして前にも述べた如く個體保存は種族保存が完成される迄のものである事は、生物進化の過程を遡る事によつて了解させられる。そこが、原本的に、肉體の最も樞要な場所であり、肉體的結合（肉體愛）の最磁場としての性器は愛の根本的な現はれの場所となる。ところが文化は性器に固着してゐたリビドーを次第に引上げて、これを色々な方面に備給する。その結果、肉體愛は漸次精神愛に變つて來るのである。

處女時代の愛情は全くプラトニックで、その愛情の集注は常に顔面であるから、たとへ淫蕩の血を受けてゐたとは云へ、尙ほ處女性を保存して居り、而もその愛の對象たるや、又精神界に住んでゐる豫言者ヨハーナンであつたサロメの場合と、過去に幾人かの男を知り肉體的享樂

の味を占めて、肉生慾活をその全部として來た樣なさだ及び吉藏の場合とは、全然對蹠的である。それ故、リビドーの纏綿（備給）が、上方（首）と下方（性器）とに分れる對蹠的過程も察知出來るのである。

果して異常心理か

さだの犯行は、行爲そのものには極めて怪奇であり、變態といふ名を冠せらるべきものゝ樣に思はれるが、併しそれは決して常人にも（少くともその無意識部分にては）不可解な心理でもなく、又通常（ノルマル）の生活には緣遠い感情でもなく、總ての性生活に隨伴してゐる、寧ろ必然的な性感動の結果である。事實、この事件に對して心底から非難の矢を向ける者は、充足した性生活を持つ婦人には決して無い。却つて何となき同情を持ち、詐りない心持では、犯人さだの境地が了解出來るものであらう。たゞ併し、社會的な桎梏とか、一般の道義的な虛榮から、一應はこの行爲に對して否定的態度を採り、殊更に眉をしかめて見せるであらうが、自分達が密かに賞翫してゐた閨門の祕密を餘り露骨にさらけ出された事に對する反感か、或は不感症婦人の

鹿爪らしい假面の下の嫉妬を除けば、多くの婦人には首肯され得る事柄であるに違ひないのである。

阿部定の無意識動機に就いて

――犯罪分析より観た阿部定の本體――

東京精神分析學研究所員　高橋鐵

××兄よ。稀代の犯罪者阿部定が逮捕當時より屢々「早く死刑になつて石田のところへ行きたい」といふ言を洩らしてゐることは、本件記録によつても明瞭であります。又、第一回公判廷に於ても、吉藏に格別情死の意なきを明言し、殺人罪の構成さるゝことを避けんとは致して居りません。

慘虐だ、變態だ、妖婦だ――と、鞭打たれながらも、世上の關心は稀有に注がれて居るのでありまず。あゝ、これは、社會全體が頽廢し不健康に陥り獵奇のみに走つてゐる現象の現れでありませうか。さうであるとすれば、これは、一殺人事件とも云へぬ程、重大な社會全體の問題であります。亡國的な象徴であります。

併し、——××兄よ、私は一心理學徒として、否と叫ぶものであります。なるほど、本件は浮薄な動機論から觀ますれば、實に奇怪な殺人罪並びに死體損壞罪に該當する事件であります。それを世人が同情的に注目してゐるとしたならば、世は正に濁世と云はねばなりません。そこで私は本件發生以來、この犯行の底には何か淸純な、人心をうつものがあるに違ひないと考へ、新聞雜誌にも二三意見を發表して參つた次第であります。

今更、私が喋々するまでもなく、近時の司法運用上に於ては、「事案を類型的に扱ふ勿れ。個別的に觀よ」といふモットーが强調されて居りますが、本件の如きは、犯罪分析の立場より觀ますると、特に、個別的審理及び量定をなさねばならぬと存じます。なぜならば、本件に關しましては、既に精神分析學徒を初めとし、諸岡存博士等も說かれる如く、被告の犯意たるや悉く無意識乃至半意識的な意味を多分に含んで居るからであります。

觀方によれば、犯行の無意識動機は勿論、吉藏も亦、淺田一博士も肯定された如く、性愛痴戲中、死にまで到るやうな「快感的苦痛」を甘受するマゾヒストでありますから、情死行爲に類するとさヘ考へられませう。(これは後に詳述いたします)

又、死體損壞罪といふ公訴事實も、實は、被告に何等の反感憎惡或ひは隱匿の意が無きこと故、――否寧ろ生ける愛人と等しい氣持で愛を捧げる形見としてであります故、前例に乏しい認定ではありますまいか。しからば被告は何が故に、結果としての大罪を犯しながらも、或る一點で世人に明朗清純な印象を與えて居るのか、私は貴下を始め健康な全大衆に、此の祕められた愛慾の謎を分析し今後の精神衞生を圖りたいと存じます。

阿部定は第一回公判記錄にもある通り、十八才の折、實父に勸められて藝妓生活に入りました。初潮期前に過失を犯した女性が家計も豐かならぬ爲、自暴自棄的に淪落の淵へ身を投げ性本能に身を委せて行く事實は、被告のみならず日夜見聞するところでありますが、かくの如きは、文豪トルストイ作の「復活」によつても、胸ふさがれる程悲しむべき人生の出發ではないでせうか。定の場合は、果して過失と云ひ得るかどうかは疑問でありありますが………。

アドラーは犯罪者の性格として、「不健全な生活計劃」といふ事項を擧げて居りますが、本件被告の一例をみましても、これは先天的性行といふ點もありますが後天的な運命から生じた點もないではないでせう。そして、斯かる生活は、當然、定を多淫にし嘘言者に仕立てゝ行きま

した。これが娼婦生活に適應する唯一の術（すべ）なのであります。が、こゝに問題となるのは、被告の性行でありますが、女性心理研究家の説によると嘘言は弱き女性の武器であるに拘らず、定は必ずしも芯からの虚言者ではないやうです。心癖（母コムプレクス）×××、××××××××××××××××××××××××××××……××××××××××××××××××××××××××××××××××。

又、多淫・移り氣といふ點も、被告自身の自供陳述で觀取されまするがこゝに精神分析學は種々推定すべきものを有ずるのであります。數多くの分析鑑定例のみならず性心理學は、かゝる移り氣の一大心因として幼兒の家族關係を重要視して居ります。我國の麗しい古典文學中の「光源氏の君」は單なる多情者でありませうか。それから、一生を戀にさすらつたドンホアンは單なる好色者でありませうか。否最近の諸研究によると、彼等は異性親卽ち母の面影が忘れ難い爲、そのやうな理想的異性を求めて失望に失望を重ねる心癖（コムプレクス）（母コムプレクス）をもつてゐる事が明らかになりました。これと同樣に、阿部定の經歷を見ますると、被告が激しい父コムプレクス（父又はその代償者を慕ふ心の傾向）を抱いてゐた事が判るのであります。

この眞劍な愛慕は、被告を次から次へと幻滅させ、遂に大宮五郎（四九）と石田吉藏（四二）とに愛慕の姿を見出したのです。「中年の絕對に優しい人」――被告の永いこと迷つてゐた愛の捌け口は優しい父の面影を發見したのです。

××××。もと〳〵我々の一生は、絕えず、愛（心的活力）を何かの對象に注ぐ歷史ではないでせうか。或る時は親を、或る時は友を、又は仕事を學問を、愛人を、夫を、妻を、子を……といふ風に、愛したい望みが充されてゐれば幸福なのであります。殊に壯年期には靈肉一致して愛する異性や愛兒がなければなりません。然るに、定には、たゞれた娼婦生活中、心から愛するものはなかつたのでした。親もなし、子もなし、眞の愛人もなし……それが、大宮氏に會つた時から、めざめたのであります。

これに關して、定が「（大宮校長から）男女の間は肉體が第一ではない。精神的に愛し合はなければいかんといはれて非常に心が變りました」と陳べてゐるのは、實に心からの叫びに相違ありません。その爲、遂に眞面目な生活へ入らうとしました。けれども大宮氏は、定にとつて、陳述の通り「まじめな決して嘘を云はない綺麗な氣持の人」ではあるが、愛人としては餘

りに父的だつたのであります。現在迄も同氏を一人の恩人として一心にかばつて來た程精神的な愛は持つてゐます。が、肉慾的な過去の生活、しかも、爛熟期の定にとつては餘りに父的で近寄るには恐しい。(それ故、眞實の父コムプレクスによる愛は寧ろ同氏にあつたかも知れません。)

斯かる心の矛盾から、定は、吉藏を、父のやうに且つ子のやうに甘えたり愛撫したりするやうになつたのであります。

大體、被告は性格學的に云ふならば、小兒的女性(チャイルドウーマン)の特徴を完全にもつた女で――例えば、情熱的・劇的(ドラマチック)・ヒステリカル・娼婦的そして自分をも制御し得ない性行であります。「この種の性格の女性を愛する男は、愛の苦痛をすら受けたがるやうな氣持のものが多い」と分析學者ウイッテルスも云つて居りますが、吉藏は正にこの條件を最もよく備えた對象でありませう。

かうして、被告阿部定は、愛によつて、泥沼にも似た過去から甦つたのでしたが、運命は皮肉にも、愛すれば愛するほど二人の關係を危うくしました。「椿姫」「タイス」「マノン・レスコー」「サロメ」或ひは映畫「モロッコ」など、みな、愛で甦らうとした女を描いて居りますが、

現實はもつと苛酷に、被告の心を脅かしました。

男を妻子のゐる家庭へ歸したくない。さういふ嫉妬と獨占慾が生れて來たのは、自供にもあります。その上、こゝに、自然の冷酷——運命的な愛と死の交錯が當然起りました。

平安朝の歌人も詠じて居ります。「戀しとは誰がいひそめし言ならん死ぬとぞたゞにいふべかりける」又「玉の緒よ絶えねば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする」……熱愛の極致で情死を遂げるのは、古來、情死心理の教えるところであります。殊に未來の希望なき愛人同志には死は詩であるとさえ云はれて居ります。その上、我國民は死を憧憬するところの「死の本能」(分析語の所謂涅槃原則)が强く、歷史談にも演劇詩歌にも樣々死の詩情が讃美的に傳へられてゐるではありませんか。否、これは我國のみでなく、世界人類全體に互り尙ほ生物界に於ても、性愛の極致に生命を投げ出す場合が多いやうであります。蠍や蟷螂の雄は交尾中雌に喰ひ殺されて欣然と死んで行く。又雌雄が逆の場合も多い。畢竟、性の行動は死の象徴であり攝取し合ふ喜びであります。心理學界の碩學スタンリー・ホールも「性愛にはやりとり(give and take)の關係がある」と規定して居るが如く、一心同體といふ愛人同志には食物から生命迄頒

ち合ふ様な歡びがあるのでせう。

これは決して情死を禮讃するのではなくして、性愛と死の深い關係を述べ「二人きり」の世界の心理を御推定願ふ次第に外なりません。そこで、八日間も愛に溺れ續けた被告等は所謂「變態」に非ずとも、生命すら投げ出すやうな心の虛脱狀態になつたと云へませう。

そして、定は「石田だけは一緒に死んでもいゝと思ひました」と自供してゐる通り心の底から情死の境地にありました。少くとも知能的には立派に常識をもつてゐる者として、その後の身の上も考へずに殺人を犯す者があるでせうか。芝居ッ氣だ等といふ論者もありましたが、それは犯罪心理學上、犯行時の無意識面はおろか、意識心理も考へられぬものであります。そればかりでなく、定は品川館で按摩に自分の記事をきかされながら「あの女は屹度もう死んでしまつてゐるわ」と呟いたとあります。これこそ、定の無意識心理から湧いた情死の告白でありました。

「私のあなた　私の一番すきなあなたが死んであたしの物になりました」といふ死によるこの獨占は、確かに加虐症（サディスチック）的な性愛をも含んでゐます。けれども、たとへば、この犯意が情死心

理とサディズムと、どつちを多く含んでゐるかと云へば、私は斷然、情死心理だと答へませう。吉藏は、なるほど、積極的に情死を迫りはしなかつたが、生命を委(ゆだ)ねきつてゐたことは「まさき」の女中達の證言でも明らかであります。その彼が刻一刻と生命なき屍になつて行くのをみてゐると、定は獨占慾の滿足と共に、寂しくなつたに相違ありません。

愛するものの屍骸を腐敗する迄抱擁したり愛撫したりした實例は少くないが、本件に於ては定は、常態以上の獨占慾で、血書の比翼塚を殘す決心をしました。塚といふのは寢具（敷布）、——元來、寢床は昔からの胎內・墓・蓮の臺(うてな)の象徵にされてゐます。詩人ヱレディヤの「床」といふ詩にも「悲しさは墳墓(おくつき)のごと、樂しさは巢の如しとも、人生れ、人いの眠り、つま戀ふる凡(す)べてここなり」とあります。この塚に「定吉二人きり」と記錄して、肉體（一部だが全體の象徵になる部分）を携えて立去つた。これが被告の公訴事實の全部であります。

それ故に私は本件の特徵を、衂(ちぬら)れたサディズムといふよりも、寧ろ、强烈な愛戀の獨占慾にありと主張するのであります。被告が、命を懸けた戀情をもつてゐないで、慘虐行爲だけだつたならば、世人は全然定を憎んだでせう！

しかも、ダヌンチオの「死の勝利」にも似た死の獨占事件たる本件には、確かに、相當濃厚なサディズムの色彩も見られるのであります。

サディズムは——性學者ブロッホによつて「人類學的現象の一つ」といはれたサディズムはおそらく誰しも幾分づつ持つてゐる性心理です。性愛の文献には、完全なる性生活に必要不可缺な行動と記されてあります。事實、閨房内の陶醉には何等かの意味の「愛の痛覺(サド・マゾヒズム)」があることを認めない方があるでせうか。「抓りや紫、くひつきや紅(べに)よ、色で仕上げたこの身體(からだ)」といふ俗謡も亦、求愛者の陶醉を意味したものでありませう。犬の親子や友達同志は互ひに嚙みあつて遊び、主人に柔かい愛咬(リイベスバイツセン)を以て愛情を現します。我々も亦、可愛い赤ン坊に「喰べてしまひたい程可愛い」等といふではありませんか。

畢竟、異常なサディズムなどと申すのは程度の問題であります。さればこそ、メルバッハ氏も「程度を越えたサディストであつても、その加虐慾は普通の人格を規定する條件とは分離して考えねばならぬ」と論じたのであります。なぜならば、(こゝに生物學の法則によつて實例を擧げますると)動物は犬でも猫でも鼠でも皆、母は仔(こ)を自分の生命以上に愛しますが、人間が

餘りいぢつたりして危險を感じると、喰べてしまふではありませんか。まことに、限度ない愛は喰ひつくすことです。一思ひに殺して永久に自己のものとすることです。「惜しみなく愛は奪ふ」のです。

被告阿部定は浦川捜査課長に殺害の動機を訊かれた時にも「好きで好きで堪らないからよ」とハッキリ答えました。確かに本件の動機はそれより他にないでせう。×××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××、××××××××××××××××××。『×××××××××××』：××××××—：××××××・××××××××××××××、×××××××××××××××××××。

此の情熱は、情熱を失へる現代大衆の胸をうちました。×××××××××××。×、××××××××、××××××、殘念ながら、その環境の罪によつて、犯罪にまで墮さねばならなかつたのであります。なぜ、私が敢えて環境の罪と云ふか?!

私は、これを二つに分けて訴へたいと存じます。一つは定のヒステリー性格で、我々精神分析學徒に分析調査をお任せ願へば、必ずや彼女の過去經驗（特に幼兒の家庭生活）から、心に

受けた外傷（いたで）を發見いたすでせう。そして人間の一生を左右するヒステリーの心因を除去いたします。しかし、分析學を學ばぬ諸學者諸先輩ですらも、被告にヒステリー傾向があることはお認めのことと思はれます、淺田一博士は、阿部定はヒステリー性癖だと述べて居られますし、一般犯罪病理學から觀ましても同學の權威ビルンバウムの所謂ヒステリー性求愛者の好典型であります。自我强く抑制力弱く感情を直ちに意志行爲に現す病理であります。

その他、生理・心理的に調ぶべきは被告の内分泌腺の狀態なのです。これは、曾てロバート・ミュラー氏の發見された病理説――異常なるサディズムは内分泌の旺盛（異常昂進）より起るといふ問題であります。被告は腦内容の異常よりは寧ろ簡單な生理・心理的病因をもつものと思惟せられます故、分析療法及びホルモン療法を受けてからこそ、初めて、その可罰價値を論ずべきではないでせうか。

その他、第二に、定の過去及び犯行當時の情狀を見ねばなりません。まづ、彼女の過去は何等かの心的外傷と内分泌腺の異常とによつて墮落に墮落を重ねましたが、人、もし、先天的・後天的に彼女と同樣な狀態に置かれた場合、誰か身を高く持し得るでせうか。私は、物心もつ

かぬ頃から娼婦になるべく生れて來たやうな女性達の大群をみるにつけ、キリストと共に叫びたいのであります。「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」と。

のみならず、前に述べた如く、犯行當時、××××××××××定は、再び斷崖の前へ押しやられました。生れて初めて愛を捧げんとした石田は獨占し得ぬばかりか今にも別れねばならぬ。「このまゝ別れて、いつ逢える?」といふ、戀につきまとう斷腸の思ひに亂れて、こゝに、定は、死の獨占衝動に驅られたのでありませう。

この心理過程は、警視廳の金子準二技師も當時發表されたやうに、お定自身にもマゾヒズム(愛の苦しみを受けんとする祕願)があつたと見るべきでありませう。愛人と共に死ぬか乃至愛人の爲に死刑に處せられるか、それすら彼女には歡びでした。かゝるマゾヒズムは、觀點(みやう)によれば、半生につきまとひ、墮落願望となつて、どん底を辿り歩いたのかも知れません。サド・マゾヒズム――墮落の願望――死の本能、これが、定自身も氣付かぬ彼女の一聯の心癖(コムプレクス)ではないでせうか。

かういふ性格と運命の悲劇が彼女をつくりました。

×××××。××××××××××××××××××××。×××××××××××××××
×××。×××××××××××××××××。×××××××××××××××。××××
×××××××××××××。

×××××。定は斯かる女でありました。しかしながら、幼兒期から現在迄の體質と環境とによつて激しいヒステリー性格の虜（とりこ）になつてゐた女でありました。そして死と愛慾に我を忘れた女でありました。

式場隆三郎博士も「彼女が他の職業についてゐて多忙だつたり、もつとしつかりした男と暮してゐたらあんな病的症狀は現れずにすんだかも知れない」と想定されましたが、その如く、澤山の困難（トラブル）があつたのであります。

往昔に於てすらも、かの八百屋お七事件などには、その動機の純情さと心神の耗弱を斟酌し奉行や老中まで課刑免除説をとなへたと傳えられます。まして現代に於ては刑法觀念も應報主義より改善主義へ進展して居ります。×××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××、×××××××××××。

「誰か狂へる？」とは精神病學の泰斗杉田直樹博士の名言であります。被告の意識心理は正常なりとも無意識面はかき亂され踏みにじられて居るに相違ないと信じます故、宜しく再鑑定の上、その心神の耗弱をお認めあらんことを。

分析療法により異常性格を淨化し、再び甦生する日あらば、阿部定も更生し得ないとも限らないと思ひます。「惡に强き者は善にも强し」とか、或ひはロンブロゾーの言の如く、「犯罪者は惡事に對すると同樣、又善事にも無條件に盡す」とか……その好例は菊池寛氏の「恩讐の彼方」にも窺はれるではありませんか。

これに反して、萬一、獄につながるゝ場合には、斯かる性行は「一度入つたら一生」といふ恐るべき變質を增大し、拘禁性の精神病に移行する危險がなくはないと思ひます。×××××××××××、×××××××××××。××、×××××××××××。×××××××××××。

妖婦お定の「定イズム」

高橋鐵

一、死の勝利

急所切取事件は、日本中の話題になつた。「ひどい女があつたもんだ」と言ふ反面、人々の心の底には何かしら同情的なものがないでもない。×××××〳〵×××××××××××××、××××××、×××××……××××××××××、×××××××、××××××××××××××××。

戀人を虐待して滿足するのをサディズム、虐待されて喜ぶのがマゾヒズムといふが、これが

観念的になつたものを民衆が持つてゐる、無意識的な願望で、つまり石田吉藏になつて見たい……といふ命をかけて見たいといふ氣持、これが血文字お定への關心となつて號外が飛ぶやうに賣れ新聞が持てはやされるのである。あの事件があつてから小野古着店は、お定の着てゐた着物を見たいとか、賣つてくれとかいふお客で大變な繁昌をしてゐるさうだ。イサドラ・ダンカンといふ妖婦は、車に轢き殺されたが、妖婦の血に汚れた此車は非常に高價で賣買されたといふことである、洋の東西を問はず人間の氣持は同じと見える。

戀人を虐待して滿足する變態性慾、サディズムは、侯爵サードが元祖である。これをちよいとモヂルと定イズム、日本に於ける元祖になるかも知れない。そしてお定の氣持は、どんな人間にでもあるので、只程度の問題だけなのである、〽つねりや紫喰ひつきや紅よ色で仕上げた……云々といふ都々逸は、花柳界などでよく唄はれるものだが、これなど、輕度の「定イズム」を、遊冶郎が甘受してゐる風景なのである、ある學者は家庭生活には「健全なるサディズム」を必要とすると言つてゐる、健全不健全は要するに程度の問題、然し又、過ぎたるは及ばざるが如しで、及ばないのも不幸の一因となる。即ちお定の精神分析と、變態性慾の問題を取上げ

世の男女諸賢に贈る次第である。

二、誰にでもある定イズム

今度の事件は、肉體的にはサド・マゾヒズム（疼痛快樂）であるが、心理的にはダヌンチオの死の勝利と見る事が出來る。そしてこのサディズムは、誰でもが持つてゐる。アルバート・モーデルといふ人は「毆つたり、毆られたりして樂むばかりが決してサド・マゾヒズムではない。例へばダンテが地獄を描いたのは彼のサディズムであるし、アラン・ポーは青年時代に失戀したので、其小說の中でしきりに彼女を殺してゐる。これは彼の「サディズムの現れである」と云つてゐる。サディズムは如何なる人にもある。夫婦喧嘩の時には「チョイ〳〵見られる事で、只お定の場合は、實に端的に、そして我々精神分析學徒に言はせれば、稀に見る、典型的な形となつて現れたと考へられるものなのである。

M遊廓の千代花とかいふ遊女があつた。そこへ村井某といふ男が足繁く通つたが、二人共商賣離れての大熱心。するとある夜、千代花の部屋で悲鳴が起つた。千代花が男の×××つた

のである。そして係官の前で言つた「可愛いから×つたのよ」と……お定と軌を一つにするものである。

三、動物本能と比較して

殺してしまうといふ事は、愛情の極致である。お定のやうな愛情は動物界でしば〱見られる。サソリは手をつなぎ合つて野原を散歩してから××し、その後雄を喰つてしまう。銀座を散歩する男女を見る時サソリの散歩のやうに思へてならない。雄は愛の抱擁中に頭を喰はれてしまうが、然し彼は後半身だけでしばらくは生きてゐる。これは事實なのである。だから、お定を、あながち、毒婦としてケナシ去ることは出來ないかも知れない、愛の極致と死との合致は不可抗な法則である場合もある。

四、卅五人を殺した愛の占有者

フランスにベラ・レンツイといふ陽氣な後家（メリーウヰドー）さんがあつた。彼女は卅五人の男を殺し、立派

な棺に入れ、地下室に飾つておいた。此不幸な男は夫が二人、息子が一人、あとの三十二人は愛人であつた。法廷の訊問で彼女は微笑を浮べ乍らかう答へた。――

問「何故澤山の人を殺したか」

ベラ「男だつたからです、私はあの人達が、一度私を××した後同じ××中に他の×××くかと思ふと、さう思つただけでももう耐へられなかつたのです」

問「それなら息子を何の理由で殺したのだ」

ベラ「あの子も亦男でしたから、男である以上、年頃になれば私の手から去つて他の女のもとに走るでせう、だから一思ひに殺したのです」と。

お定も其遺書に――

「私の一番好きなあなたが死んで、あたしの物になりました」

と書いてゐるが、これはベラ・レンツィと同じ心境、愛するが故に殺したのである。

五、生駒山で死にたい彼女の氣持

お定は叉性×崇拜者でもあつた。これと逆な場合がかつてあつた。昭和七年、増淵倉吉といふ四十四歳になる男は、十九のお針子に戀し夫婦になれないのを悲觀して彼女を殺し、目、耳、臍、急所、乳房等をバラ〳〵に切り取つてポケットにしまひ込み、更に皮膚をはぎそれを身にまとつた上、首をくくつて死んだ。お定がアレを大事にして持つてゐたのと同じ心境なのである。そして彼女は生駒山で死にたいと云つてゐるが、きく所によると、生駒山には淫祠があつて木彫の怪器をそなへて祈願をこめれば、如何なる緣をも結んでくれるといふ話である。彼女は永遠の緣結びの願をかけてから、死なうとしたのかも知れない。

六、同時に二人の愛人、妖婦の規格

妖婦シルスベリイ伯爵の娘アンナは愛する男が出來ると、もう一人の愛人を拵へ、二人を決闘させて喜んだが、得て、妖婦は同時に二人の男を愛するものと相場が極まつてゐる。彼女にも大宮校長と吉藏の二人があつて、ちやんと此規格にあてはまつてゐるのも面白い。即ち父戀愛と母性的愛情との二つがあるので、大宮校長の場合は前者で、吉藏は後者になる。高橋お傳

定とお傳は多少其心境に相違があつて、むしろ、お定の方を純情な妖婦と見たい。

も、若い燕浪之助を愛し乍ら、一方市助にも戀し、結局浪之助を殺してしまつてゐる。尤もお

七、變型心中前の愛慾陶醉

つまる所、これは型の變つた心中ではないかと思へる。女は遺書を書いてはゐたけれども死なゝかつた。自殺が例へお芝居であつたにしても無意識心理では心中と見る事が出來る。ラテン語の諺に「交はりの後に生ける者は悲し」といふのがあるが、お定吉藏二人の幾日かの陶醉は歡樂極まつて哀愁深しの境地になつてゐたに違ひない。吉藏はサソリの雄のやうに、喜んで死んでいつたかも知れないのである。待合「まさき」の女中が吉藏に逃避をすゝめたけれど、役はそれを肯じなかつたさうである「死ねば死ねさうに女と七日ゐる」……此雀郎君の川柳が吉藏の氣持かも知れない、心中前の愛慾陶醉であつたに相違ないと思はれる。

×

この事件で號外が出たりしてゐる頃、私は〝定イズム〟といふ言葉をつけてみた。これは單

にサディズムをもぢつただけではなく、私か胸で一人合點をしてゐた意味では、サディズムの登りつめた症狀のことだつた。

いつも現象の表だけみる世人は、いやに局所にこだわつてゐたが、この症狀の純粹な定義は、いはゞ、「對象愛から來た全的攝取」（愛するが故の、死による獨占）のことだ。サディズムの根は破壞慾、破壞慾の根は死の本能だから、この死の本能が自分と愛人とを全く同一化した時、一系列を貫いて、この形をとる。

サロメや「死の勝利」をはじめ、多くの無理心中は（普通の情死を含めて）大概この無意識論理をもつてゐる。だから、本當は、定イズムなんてそれ程珍しい心理ケースではない。たゞ、定の場合には、幼兒からの强烈なペニス羨望が加はつて（抑厭をおしのけて）無意識願望の命ずるまゝに振舞つた爲に、世人がドキンとしてしまつたらしい。それに、金錢的懸引等のない狂戀は、いつの世でも「純粹」な感を與へものらしい。

姐御女優N・F君は私に語つた「やらうと思つてたら先にやられちやつて……」と。詩人SF女史も「私だつたら……」と前置きして定のペニス羨望を求眞道まで高めて祕語を云つた。

岡邦雄氏も述べた通り「かかる變態的獵奇的事件に對し、世人、特に婦人が意外にも（實は極めて當然のこととも云へるが）反感よりは寧ろ同感的な興味を有つてゐるのは、社會的にも弱い女性は、定イズムによつて生物界の見本市を示されたに違ひない。さすがに警視廳の金子技師は巧みな警告を發表された。「色慾のデパート」と。

八、探偵小説家の「恐怖」

雜誌『話』の座談會（昭和十一年七月號）をよむと、いろ〳〵な恐怖やスリルを創造する探偵小説家諸氏がみんなでよつてたかつて、お定のペニス羨望的行動に恐怖して、死刑にしろとか何とか鳩首協議を遂げてゐる。

これによつて、分析者は襟を正す。あらゆる恐怖の原型は、殆んど總て、去勢コムプレクスから發生してゐるのだ！（「精神分析」二卷五號、岩倉具榮氏稿參照）

九、お定の「勝氣」の根源

定の知人達は口を揃へて彼女の勝氣だつたことを證言してゐる。その中でも、本書中別頁引用の『婦人公論』七月號所載『疊屋の定(サー)ちやん』（久保久美氏稿）にはよき分析資料が多い。彼女が小學校時代に春ちやんといふ男子部の級長を「愛人(いゝひと)」にする心理——自分が十番以上になれないから、いゝひとに、代りになつてもらう氣持！（これは、實にハツキリした補償作用だ。）

又、男湯に入つてゐる男兒達と仕切越しに喧嘩して、そつちへ行けたら謝らせると云ふ條件の下に敢然と、男湯へ乗込んで行つた氣持！（ペニス羨望を虚勢張つて克服したのだ。）

この二つの話によつても、お定が、子供の時分から、男性たる愛人によつて、（いくら勝氣でも結局仕様のない）女性のひけめを補ひ、その誇りを身につけた心理が理解できやう。

十、美人薄命の理由

『疊屋の定ちやん』を讀んでゐると、文學的な魅力さへある。一度、一葉の『たけくらべ』を讀んだ人なら、この兩者が入り交つてしまう程よく似てゐると思ふに違ひない。

彼女は美登利のやうに女兒の大將たる位地にゐて、いろんな男の子から求愛され、親や隣人にさえ、あらぬ疑ひをかけられたり檻禁されたりした。その擧句、みんながさう思ふなら本當にそんなことをしてやらうかと叫んださうである。これは口實（自己合理化）だけではない、もつと意識的な反抗心の爆發だらう。そして到頭、近所の青年と行方不明になつちやつたり、不良團に誘ひ込まれたりして了つたのだ。

美人薄命の原因はこんなところにもある筈だ。お定は、かうして美人といふデコラティヴセックスを自己虐待的に「薄命」にして行つたのかも知れない。今後も、教育者は、かういふ分析力をもつて、美しい女兒をよく導いて貰ひたい。

十一、露はの本能の一生

ニュース映畫の「お定逮捕の光景」をみて、知人達は慄然としたと口々に云つた。彼女はいかめしく囚へられながらキャメラの前で艶然として笑つてみせてゐる。

お定は品川館でも、按摩や風呂番にも、露はを誇らうとしたさうだが、第一、犯罪そのもの

が公開心中の趣きをもつてゐるではないか。「綺麗だ〱」などと云はれて育つた子の「明眸有罪」は、永い一生につきまとう。

人間の露出慾は誰にでもあるが、それを皆、昇華したものにしてゐる。スポーツ・舞臺・銀幕・酒場・演壇等々にそのチャンスをみつけて昇華し發散するのだ。けれども、彼女のやうに、誇るべきものを他にもつてゐないものは、肉體とか感情とかを露出するより外に仕方がないに違ひない。

誰でも持つてゐる人間のバラ〱な部分本能を、將來、より良い形にして行くのは、分析學の使命になるだらう。これを「昇華教育」と云つておいてもよい。（前掲、岩倉氏「部分本能のいろ〱」參照）

十二、五月とヒステリーと藝術

ロムブロゾーの『天才論』によると、創作活動は五月に最高である。內務省防犯課今村技師の統計によると（昭和六年—十年）、自殺件數も五月に於て最高である。それから、受胎も然り

女子身長の發育も然り、病死數も然り、發狂數亦第二位となつてゐる。ヒステリーの昂進なども統計をとつたら五月に最高かも知れない。

そして、ヒステリー性性格であるお定が（不愉快な言ひ方だが）デ・クキンジーの所謂『藝術の一種として觀たる殺人』をやつてしまつたのも、此の月だつた。

元來、ヒステリー症狀は無意識的空想の現れである。（大槻憲二氏著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』參照）そして、藝術にも同樣のことが云へる。

お定は、自他共に彼女の手綱をおさえなかつたまゝに、原始的な人類の無意識的空想を實行してしまつた。五月といふ、濕度、溫度、氣壓、共に人間の覆ひをはぎとる時に！

こんな關係を考えても、我々は今後、益々、科學的、深部心理學的自己訓練が必要だと警告したいのだ。

十三、悲しい Feratio

新居格氏から訊いたのだが、この事件が發生すると、流行作家T・H氏は、お定の材料を集

めに走り廻つて、特種を見つけた。それは彼女の「形見」の隱匿場所で――實に奇妙な Feratio 代償が推定される。

Feratio は昔から非常な變態行爲だと思はれてゐるが、無意識心理機制からみると決して不思議ではない。吸乳期の口唇性感が、女性の場合には、男性を羨望し攝取しやうといふ願望と結びついて、この行動になる。

ところが、女性に男兒でも出來ると、母親の去勢コムプレクスは補はれる。そして夫は夫自身になれるのだ。が、兒なき女性にとつては、夫は父代償や息子代償を兼ねて欲しい。

阿部定の求めるところもこゝにあつたのであらう。石田は愛人で父で息子でなくてはいけない。殊に息子代償であつて欲しかつたのだ。(もし、彼女に子供でもゐたら、愛情もこれほど執拗ではなく、勿論、Penis-neid から生れた「慘虐的」損壞もやらなかつたであらう) そのサン・ラヴーを奪はれさうになつたので、彼女の「定イズム」が突發したのである。

姙婦から兒を奪ふ鬼婆の心理も愛情から出發してゐる。(長谷川誠也氏著『遠近精神分析觀』中「奥州安達原の精神分析」參照) お定が石田を殺害して、彼を永久に自分のものにしやうとした心理

――殊に轉位した Feratio 行爲は、精神力學から解すると悲しさの極み、極みなき破局ではあるまいか。

十四、燃え移るマゾヒズム

今度の事件で世間が沸騰したのは、必ずしも誇大なジャーナリズムの罪ではない。この犯行は、人生や社會に幾多の研究資料を投げた。尤も、譯もなく騒ぐ人々は、彼等自身の危険性をさらしたことになる。

私は、大衆を昂奮させたのは、彼等の無意識的なマゾヒズムだと思つてゐる。云ふまでもなく、社會生活を（殊に現代の苦しい生活を）續ける爲には、人々は適度のマゾヒズム（苦痛を甘受する態度）が必要であらう。けれども、同じく甘受するにも、金や權力の重壓よりも、逃避的な妖女の壓力の方が快いに違ひない。そこで、お定出現をみた人々のマゾヒズムは、現實の鬼から、お定へと、マゾヒズムを燃え移した。

かうして、露はな妖性は人々のリビドーを集める巨母（マグナマター）（社會の母）になつた。春日の局と

か浪子とか九條武子とか唐人お吉とか、……大衆の巨母は今迄隨分居たが、この一九三六年にかういふ巨母を求めた大衆の集合無意識！　これこそ、冷靜に自己分析（科學的反省）をしなくてはなるまい——ではないか？

戒心すべき誰にもある傾向

東京精神分析學研究所客員
醫學博士　諸岡　存

此の事件に就ての各人の感想は色々であらうが、大體二樣の觀方に考へられて居るやうである。

第一は、普通の教養のある婦人の考へ方である。彼女の行爲は、女性の醜惡を暴露した最も悪む可き者で、全女性へ對しての侮辱であり、叛逆である。彼女の行爲は人間ではない。これは獸的行爲に他ならないといふのである。

此れに反して、自由思想派、又は本能派の考へ方としては、此の犯行は、或意味では、勿論醜惡には違ひないが、又一面には、非常に同情す可きものがあるやうである。（中略）殊に或意味で考へると、彼女の此度の犯行は、全く世間を超越して、現社會の制裁を怖れず、而してすべてを犧牲として擲つたものであると、（中略）此の二樣の見解は、全然相反した見方であつで

前者は、妖婦高橋お傳や、殷の紂王の寵妃妲妃の如く、自分達女性には全く關係のない、寧ろ女性の叛逆者であつて、彼女の行爲は、人前で話も出來ない獸的汚行で、社會公衆の前に公言す可きものでないといふのである。

併しこの種の意見の持主である淑女達自身にも、矢張り自らを欺いた、或は無理にも偉ら振つてゐる所の、一抹の不安があるのではなからうか。

後者の人情派の方は、前者の淑女流の如く、然かく倫理道德に拘束されなくて、感情と本能とに勝つた者の觀方で、寧ろ生物學的本能心に觸れた考へ方である。

この方は、謂はゞ或意味に於て、自已の本能をよく了解してゐるともいへる。（中略）これは倫理や道德に捕はれず、直に本能に訴へてゐるものといへるのである。この説には、眞實の部分が多分にあるのである。前者の教育派は此點をはつきり感得しきれない憾みがある。

此の兩方面の見解は、極端と極端との交合である。各個人の考へ方は、其教育により、又性格により、境遇によつて、大に異つてゐるであらうが、要するに、眞理は何時も兩極端の中間にあらねばならぬ。

吾々の本心の裏には、如何なる人も、本能的に此の傾向を把持してゐるものである。

殊に現代のやうな社會狀態に於ては、輙もすればやりかねまじい脫線であり、轉落である。戀愛といふ猛烈な感情の「ガソリン」で驀進した自動車は、得て無軌道的に突進し、顚落したがるものである。

騷々しい社會で、スピード時代である限り、如何なる階級の男女もこの危險を抱藏して居る。衝突しないやう、顚落しないやう、呉々も「ブレーキ」に注意す可きである。見解の相違は、軌道の自由の範圍如何による。

例へば電車は軌道丈けしか走れぬ。而し今日では、電車丈けでは却々用が足りない。自動車は無軌道である。從つて危險性は多いかも知れぬが、時と場合によつては何うしても自動車によらねば用が足せない事がある。

今日の社會では、我々は必ずしも二條の軌道を走る電車に乘らなくても、もつと廣い車道を自動車で走る事が出來る。が併しこの方は、顚落、衝突等の危險も餘程多い。

飛行機になれば更に立體的に、空間を自由に行動し得る。併し、それ丈け又一層の危險性を

伴ふのである。

危險は多くても、吾々は時勢の進展を餘所に、何時迄も軌道計りを便りにする譯にはゆかぬ。こゝに困難が在るのである。

本件の犯人お定は、隔つた末つ子に生れて、兩親に溺愛され、我儘三昧を通す癖が付いたものらしい。彼女の欲するものは何でも通して來た。それが成長して次第に、社會に出るにつれても、彼女の欲望を抑制出來ぬ强情者に育ちあがつたのである。そして彼女は氣隨氣儘の增長した結果、「與へられねば自ら取つて見せる」といふ無法な性質が出來上つた。其徑路が如何にもよく分つて居る。此れは實に我々に取つて又得がたき敎訓である。罪惡は決して一朝一夕で出來上るものでない事が最もよく敎へられてゐる。

人間が欲望を持つてゐる事は勿論で、それはやがて仕事の原動力である。欲望がなければ進步も發達もない。併しそれが、或程度迄敎育と躾けとによつて統制されぬ限り、無軌道的に走る惡癖がつくのは當然であつて、彼女には此の家庭敎育や躾けが全然誤つてゐたものらしい。

人間の奥底には、皆、所有慾がある。隨つて物も又人をも盜まうといふ萠しもある。そして

教育の程度の低い、訓練の欲けた原始人程、それが露骨に表はれてゐる。卽ち物品でも、財寶でも、愛人でも占有し度いといふ欲望は人間にはある。併し、これ等は勿論相當の制限を受く可きものであつて、無制限に奔逸す可きものでなく、其の限度は自づから判然してゐるものである。

好きだからといつて、無暗に、又無理押しに、之を他人より奪ひ取るのは惡である。社會が之を許さない。

然るに、躾けが缺けて育つた彼女は、この慾望を、無軌道的に大膽に、平氣で遂行しようとしたのである。他人の男でも平氣でこれを奪ひ取つた。

結局彼女は戀愛陶醉の極、彼女の制し切れぬ本能に驅られて、其の相手を殺したのである。これは正に病的の慘虐戀愛である。而かも狂的な殘忍行爲迄敢てしたのである。斯くて彼女は到々戀愛の邪道に陷つて了つた。

あくどい彼女は、殺人罪は愚か、屍體戀愛迄も敢てし、あまつさへ血痕に陶醉して居る。彼女はまさに狂人である。人間の公道から顚落して邪淫の地獄に陷ち込んだ惡鬼羅刹である。こ

の意味で、此事件は、不良少女の落ち行く運命を最も良く敎へてゐる。全く拘束のない欲望を飽く迄も貫徹せむとするものゝ歸着を敎へてゐる。この種の妖婦は、今でも昔でも、世間には隨分澤山ゐるには違ひないが、左程大事に到らないのはつまり、しつかりした家庭、健全な社會があつてこれを保護するからである。

現代では、男女の交際は甚だしく自由になり、又個人の行動は、極端に開放されてゐるので青年男女の行爲を監督する事は非常に難かしい。情慾に奔逸して、其の滿足を追求する男女に對して如何に其取扱ひが困難であるかは、今度の實例が最もよく敎へてゐる。

此處にもう一つ注意す可きは、現代の婦人は、謂はゞあらゆる嬌態を旣に發揮し盡してゐるといつてもよい。レビュー、ダンス、映畫等で、旣に麻痺し切つた男女は、最早、普通の方法では刺戟を感じなくなつてゐる。然るに彼女のやり方は、特に、大膽で、圖拔けて居る。何等の羞恥もなく、怖れもなく、拘束もない。全く無遠慮に、露骨に、嬌態を發揮する。

强烈な刺戟に馴れて、感情の鈍麻した現代の男は此の奇拔な、飽く事なき、彼女の嬌態にはすつかり眩惑され度膽を拔かれつつ、彼女の魔法にかゝつて了つたのであらう。

それでも男には、猶ほ良心があつた。或は家庭人として、又社會人としての人間性が、彼れをして、不安を感ぜしめた。然るに此時既に彼女は狂的となつて居たのである。

抑々が常軌を逸してゐる猛烈な情慾の女が、長い時日の間、放漫な性生活で、亢奮の連續の結果、神經衰弱から狂的に迄進んで此慘虐を敢てしたのである。

此麼狀態にある兩人を、其儘に放任すれば、何の道、無慘な結果に到達する事は、當然過ぎる程當然である。然るに雙方の家族が之を放置して、社會も亦、これに注意を拂はなかつた。兎に角、今度の事件は、近代稀有の事件で、その犯行が如何にも病的であつたにも拘らず、それが又、不注意の間に、一時にパッと擴がつた爲めに、非常に世間の關心を買つたのである。敎育家でも、法律家でも、或は醫者でも、あらゆる階級の人々が強い衝動を受けたことは事實である。(中略)此種の事件は、それに對する相當の認識と、理解とがなくては續發する怖れがある。

此れは狂者の爲す事で、我々常人には關係なしといつた態度をとるものは、自ら人間の本性を知らず又現代社會に對しての理解力のない事を自白するものである。

此れを當然と認むるものも、亦現代の缺陷を知らないものであつて、共に社會を破壞に導くものである。

眞理は常に、兩極端の中間に在ると思ふ。

女性愛慾問題としてのお定事件

東京精神分析學研究所理事　大槻憲二

一、お定の昆蟲本能

近來の殆ど國民的大事件とでも云はねばならない程に、人々の間にセンセイションを捲起した所謂「血文字のお定」の行動を女性愛慾の問題としてこゝに考究して見たい。私は彼女を直接分析診斷しないので、たゞ各新聞紙の報道するところに依據しての分析であるから、以下は今までの諸々の類似事實に就いて結論を、彼女の場合にあてはめて推定を下して見たに過ぎないのであることを諒承せられたい。

阿部さだはとにかく殺人者であり、またあれだけのグロテスクな行動を敢てした變態者でありながら、世の男子たちがあまり彼女に惡意を持たず、寧ろ多少の好意さへ示してゐる者が多

く、殊に或る青年の如きは、彼女が遁れて自分の懷に隱れたならばそれをかくまつてやるとまで揚言してゐるのを私は聞いた。彼女の行動は事實、變態であり凄慘ではあるが、そこに一脈の無邪氣さ、純眞さの存してゐることが、人々をしてかくの如くに好意を持たせるのであらう。少くとも徹底的な惡意を持たせないのであらうと思ふ。實際、彼女は情痴の人であつて、利害の人ではない。情痴者は痴人であつて惡人ではない。動物には罪はない如く、彼女にも罪はないかも知れない、それほどに彼女の行つたところは動物的、と云ふより寧ろ昆蟲的であつた。彼女は人間と云ふよりは動物、動物と云ふよりは生物、生物と云ふよりは昆蟲と云ふ方が適當であらう。

彼女は警察官（浦川課長）から「どうして男を殺す氣になつたか」と訊問せられて、「好きで好きでたまらないからよ」（二十二日朝日新聞）と答へてゐる。この答辯は噓ではない。併し「好きで好きでたまらない」男を殺すと云ふ心理は普通一般の人の常識では理解出來ない筈だ。これは人間の意識心理の働きではなく、無意識心理の働きである。無意識心理は人間が動物から遺傳的に繼承して來てゐる心理がその根抵をなし、なほその上に野蠻人時代、幼兒時代の經驗

の沈潜して心理深層に累積してゐるものである。お定の行動は無意識的として昆蟲的であると云つたのは、一つにはそれが意識的行動として解釋が出來ない。(矛盾してゐる)ためばかりではなく、また昆蟲は屢々これに類する行動をとるからである。蠍やそれに類する昆蟲類に於いては、交尾後に雄を頭から喰ふものが多いことは人々の知るところである。

それればかりではない。性交とは一體に情死の境地であるとは、某有識婦人の語るところで、否、別にその婦人の保證はなくとも、分析學の研究結果も亦、性の觀念と死の觀念とが我々人類の無意識に於いて一致してゐることを認めてゐるのである。吉藏お定兩人の場合のやうに、幾日も寢床に入浸つて情痴の限りを盡し、食事も寢床の中でとり、酒は一日に十數本も飲むと云ふやうな溺れ方をしたならば、結局はあそこまで行くより外に途はないやうに思はれる。

二、刑罰の情死幇助?

吉藏は寧ろ殺されることを望んでゐたやうである。尾久町の待合「まさき」の女將が吉藏に逃亡を勸めたけれども彼はそれを肯じなかつたと云ふし、首を絞められさうになつても男は細

目をあけて「おかよ！（彼女の僞名）」と呼んだのみであつた、その時「グット締めただけサ、あの時石田が怒鳴つてくれゝば、殺さないで濟んだのに……」（朝日新聞）と本人が告白してゐるところを見ると、被害者は寧ろ死を希望してゐたらしくさへ思はれる。さうしてから云ふ極端な情痴の境地に於いてはから云ふ風に死を願望するのが、自然な心理過程であると思はれる。

女にもその時、自殺の意圖はあつたと思はれる。彼女の懷にしてゐた「遺書」が滿更お芝居ばかりであつたとは考へられない。廿一日の朝、係官に向つて「すつかり氣持が淸々しましたわ、早く死んで吉藏さんのところへ行き度いよ」（都、二十二日）と云つてゐるのも、一概に虚僞とは云へない。故に、これは一種の情死であると見ることも、（都、廿五日、高橋鐵氏）正しい。彼女が品川の旅館で捕へられた時も、寧ろ先方から名乘り出たやうな形になつてゐて、彼女に於て捕縛される心持が多少あつたことは否定出來ない。捕縛せられて死刑にされて、早く「吉藏さんの所へ行きたい」と云ふ豫想があつたと見ることが出來る。

このやうに形式こそ變つてをれ、そこに實質的には情死と見られ得べき餘地が存するとなると、これに如何なる處罰を加へるべきかは甚だデリケートな問題になつて來るし、またそれに

對する裁判所の態度も我々に頗る興味ある問題となつて來る。何となれば、もし彼女を死刑に處して彼女が喜んでそれを受けたとすると、一體、所刑の懲罰的、敎訓的意義はどうなるのであるか。刑法は結果に於いて不倫者の情死を幇助すると云ふことになるかも知れぬ。

「三日間も逃げ廻つて苦しくはなかつた」と浦川課長が尋ねたに對し、

「あの人（實はその一部分）と一緒にゐるんだから安心で、追はれるやうな氣持はしなかつたわ」などゝ惚けてゐる。

續いて課長が、「死刑になつてもよいのか」と訊くと、

「死刑でも何でもいゝ、控訴なんかしないよ」

と嘯いてゐる態度に、滿更氣取りもなさゝうに思へる。さうだとすると、刑法の懲罰及び敎訓の意味は動搖を來す。刑法學は今後漸次に改造せられねばならなくなるかも知れないと、私は考へざるを得ないのである。

三、ユーディット型の心理

愛の極致に於いて××を×斷すると云ふ心理は、如何なる機制に支配せられてゐるのであらうか。一體、性的衝動の中には兩性何れの側に於いても、非常に攻撃的な要素が含まれてゐるのであつて、それは正に精蟲が卵子の中に突入する勢の中に象徴的に見られると云つていゝ。男性側からは女性を克服し占領することを意味し、女性の方からは男性を喰ひとり嚥下すると云ふ精神を持つてゐるのである。性愛の極致はこれ等兩方の攻撃精神の合致を意味するのである。即ち、愛の極端は憎の極致と合致するのである。何となれば、よしんばこれを攻撃し征服するにしても、下らんもの（愛するに價せざるもの）を克服し攻撃しても始まらないからである。敵に廻はして不足のないものでなければ、喧嘩や戰爭は誰もせぬものである。故に、偉大なる人や優れた人から、喧嘩相手にして貰ふと云ふことは、その人の名譽であり光榮である。何となれば、その人はそれだけに認められ、愛せられたことを意味するからである。

女の方から男に對する心理の中にもそれと同じ機制が支配してゐる。女としては、誰が愛しもしない男の××までもとつてやるものか。況んやそれをとつて後生大事に持廻つたりするものか。お定の吉藏に對する心理の中には正にこの機制が働いてゐる。人間は甘いものであれば

こそ喰ふのだ。愛すればこそ殺すのだ。××はそれ自身、相手の一部分を（全身の代表として）……………ことを意味してゐるのである。

お定が浦川課長の問ひに答へて（右に引用した通り）「あの人と一緒にゐるんだから……」と云つてゐるが、その引用句に私は註をつけて「實はその一部分」と書いておいたが、無意識心理にとつては常に一部分と全體とが混同せられ、或は相互に代償せられるのである。性器はこの場合全身を意味してゐるから、あの紙包みを持つて「あの人と一緒にゐる」と云ひ得たのである。で、彼女に於いて、彼を絞殺したと云ふことが、既に下腹部を××したと云ふことを意味してゐると共に、また下腹部を××したことの畫龍點睛であつたのだ。

このやうに全身と一部分とが相互に代償せられるやうに、全身の内の一つの部分が他の部分の代償となることもある。その內、最も多く見られるのは、下腹部の代償として頭部が切斷せられることである。さう云ふ愛の殺人（首斬り）の事件は多いが、これが傳說の中に現はれてゐるものとしては、聖書の中の『サロメ』の物語と『ユーディット』の物語とがある。サロメの物語は英國文豪オスカー・ワイルドによつて戲曲化せられ、わが國に於ても澤田正二郎と松井

須磨子とが上演して人々の間に有名になつてゐる。サロメがその愛する聖者ヨカナンの口に接吻する事を求めて拒絶せられ、國王ヘロデに乞ふてヨカナンの頭を斬らしめて、思ふ存分接吻したと云ふ話。ユーディットの話と云ふのは、これまたドイツの文豪ヘッベルに依つて戯曲化せられ、わが國では河合武雄によつて、上演せられたが、世界的に有名な話である。自分の町を敵の來襲から救ふために、處女ユーディットは町の犧牲となつてその操を敵將ホロフェルネスに棒げ、後にその首級を擧げて歸鄕すると云ふ筋。これ等は意識面の意圖のために込入つた筋となつてゐるが、これを精神分析してその民族的無意識内容を抉剔すると、女性の愛の下腹部切斷願望を表はしてゐるものと云ふことに解釋せられるのである。町を危險から救ふためとか、貞操を破られたことに對する復讐とか云ふことも、總てみなそれぞれに重要な意義を持つてゐるにしても……。故に、精神分析學徒は、お定の如き心理をサロメ・コムプレクス又はユーディット・コムプレクスと呼ぶことにしてゐるのである。敢へて必ずしも珍しい事件ではなく、最近アメリカにもこれとそつくりの事件が勃發したと云ふことである。また五月二十五日の都新聞夕刊には「お定亞流」と題し、M遊廓の千代花と云ふ遊女が村井某と云ふ馴染客に同様の處

置を施し、「可愛いから×つたのよ」と囁いてゐたと云ふ話を報道してゐた。

四、血文字分析考

次に我々が特別の關心を寄せるのはあの血文字である。男の左大腿部と敷布とは血潮で書いた「定吉二人」又は「定吉二人キリ」の文字、及び死體の左腕に生々しく刄物で傷けた「定」の文字などが何を意味するかと云ふことである。これを只のナンセンス、子供らしい惡戯と輕く見ようとする人々は勝手に見るがよい。我々分析學徒は斷然そこに無意識の深い意圖を豫想する。

では、その無意識の意圖とは何であるか。それは、私の想像分析によると、刺靑の心理と同じものである。刺靑をすると云ふことは、そこに描かれたものゝ魂を吹き込むと云ふ意味であることは疑ふ餘地がない。例へば、蜘蛛の刺靑をすると云ふことは蜘蛛の精を吹込むと云ふことなのである。「定」の字を刻み込んだと云ふことは、自分の魂を相手の肉體に喰込ませたと云ふことで、この女の男性的性向を示してゐるものであると思はれる。

「定吉」と云ふ名は、自分の名の「定」と男の名の一字とをとつて結合したものであることは、大抵の新聞紙の推察してゐる通りであるが、併し定吉なる字が一つの男の名字を構成してゐると云ふことに就いては、人々は解釋を下さうとはしない。併しその下に「二人キリ」と云ふ字が付いてゐるのであるから、これは意識的には二人を意味することは疑ひないが、「定吉」と云ふ名は同時に、彼等二人の間に生れたと空想せられた子供の名前を無意識的に意味してゐるものだと私は推定したい。

この推定は、彼女が男の下腹部を××つたと云ふ事から下されるのだ。××られたものは、彼女の子供としての意味があつた。何となれば、彼女は恐らく不姙症で子供を孕むことが出來ないと云ふ自覺があつたであらうから——。女にとつて自分の愛する男の胤を宿すことが出來ないと云ふこと位淋しいことはないであらう。從つて、自分の愛する男の子は何とかして生みたいのである。それが不姙症のために自分に許されないとなると、その代償として相手の「×」を切取ることにする。そしてその名を「定吉」と名付ける。二人の名の一字づゝをとつて子供の名にすると云ふことは、惚れた同志の夫婦が常々する甘い常套的の方法である。諸君の身邊

にもさう云ふ實例が多いであらう。

自分の愛する男との間に子供を生すことが許されないとなると、それを他の女との間にも許したくないと云ふ心理になつて來る。その心理の强さは、男への愛の强さと正比例する。そこで男を自分に專有し壟斷すると云ふ意味でも、男を殺し（下腹部を×り）たくなるのである。切斷の心理には、さう云ふ利己的な動機も含まれてゐて、非常に複雜であると云ふことを知らねばならない。

五、お定の少女性と妖婦性

お定は吉藏を坊やのやうに扱つてゐたと、待合の女中が云つてゐるが、女は年增になると愛慾の形式が常に大體に於いて母性的＝妖婦的となるのであつて、殊に彼等の場合のやうに、數日の流連に精神の退行した場合には一層幼兒的となるのは自然であらうと思ふ。女は母性的（妖婦的）となり、男は坊や（若き燕）的となつて、こゝに母子關係が復活されて來ることは戀愛性慾の定石であつて、敢へて奇とするに足りない。

お定は母性型＝妖婦型の女ではあるが、同時に少女型をも多少保存してゐないではないのだ。それは總ての女に於いて云へる事なのだ。たゞ、普通一般の女は、かう云ふ天才的妖婦の場合ほどに判然とした形で顯れないだけのことなのだ。

彼女がとかく主人だとか學校の校長などゝ云ふものと多く關係してゐるのは、その少女型のさせる仕業であらう。父親を子供として扱ふとの願望は、實に女が既に早くその幼兒時代に種々の歪められた形で示す顯著な傾向であるのだ。彼女は無力な若き燕を飼ふやうにして、年少の男を可愛がると云ふ方ではなかつたらしい。やはり父親型の男、或は父親的地位にある男を子供に還元させることに大きな面白味を感ずる方であつたらしい。

併し彼女が、中京商業學校長大宮氏を籠絡したやり方を見ると、完全に妖婦の常套的手口を用ゐてゐる。妖婦が男を籠絡する常套的手口と云ふのは、男に同情心を起させることなのである。分析術語で云へば相手に「救助願望」を起させる事なのである。母親への幼兒的定着ある一切の男子は、みなその定着を一切の女に轉位するので、もしその女が困難な位置、殊に性的危機に直面してゐるのを見た時には、何とかしてそれをその窮地から「救助」したいと願望す

るやうになる。このやうに救助の願望を起すと云ふことが、即ち惚れてゐると云ふことなのである。「可哀さうだつて惚れたつてことよ」と云ふのは、そこを云ふのである。

五月廿四日、大宮校長が尾久署に於いて告白したところの一部を左に引用して見よう。如何にもその救助願望を動かされた有様が歴々と出てゐた。

「……私が最初にあの女に會つたのは昨年の四月末、名古屋覺王山の葉櫻を見に行き、『壽』と云ふ料亭に上つた時です。あの女はあそこの女中だつたのです。其時女は、私は夫に死に別れ、叔母の所に預けてある九歳になる娘に養育費をやるために、から云ふ商賣をやつてゐると云ひましたので、非常に氣の毒に思ひました。十日程經つて今度は娘が死んで東京へ歸るとの話でしたので、私は一層同情しました。女が上京の砌益々淪落の淵に沈み行く哀れなる狀態にて、その上救ひ難き惡性の病身なるを知つて一層憐み、何とかして此れを救はんとする心情を起し、又彼が小生の身分を知り居る關係上、更に救護せんとする一種の心理とが合さつて一段と深入りをなし、（中略）物質的並びに精神的方面より援助を與へ、彼を品性ある婦人たらしめんと力を盡したのでした。」云々と。

如何にも教育者らしい迂愚な物の云ひ方が馬鹿々々しいほどであるが、なほ他面そこに多少の嘘のあることを我々は感ずる。體裁のいゝやうなことを云つてゐるが、實はやはり女の性的魅力に引きづられたのが最初の動機であつたのだ。でなければ、それほど精神的に救はうと思つた女と肉體的に關係を結ぶ必要はないではないか。教育者の身としてかゝる淪落の女と關係することへの良心の咎めを自身に胡麻化すために、自分はこの女を救はうとするのだと云ふ屁理屈の煙幕で自分の理性の光を掩ふてしまつたのだ。さうしてこのやうに救助願望の形式で男の良心の眼を眩させるのが、實に妖婦の常套的手段であるのだ。さう云ふ實例を擧げてくれと云ふなら、私は幾らでも擧げて御覽に入れる。

校長はそのやうに人のいゝやうなこと(嘘)を云つてゐるが、女は他方に警察署で「あの人(校長)は潔癖屋で、何をしても直ぐ手を洗つたり、顏を洗つたりするんで、水臭いから嫌ひよ」と云つてゐる。校長の述懷がもし本音だとすると、如何にも馬鹿な眼を見てゐるわけである。

六、病源調査と科學者の怠慢

彼女は完全に校長を欺いてゐたのだ。校長の前へ出た時は、さぞ殊勝らしい顔をしてゐたらうと思ふ。吉藏の前では完全に傳法肌を露出してゐたことだらうと思ふ。こんな女を大宮校長の力などで救へる筈が、抑々ない。そこを自覺しないやうなことで、何で教育の實など擧るものか。私は大宮氏一人を批難しようとしてゐるのではない。教育界そのものが、まるで人間について、自己の心理について無智でありすぎることを慨嘆してゐるに過ぎないのだ。

それにしても、かう云ふ女は如何にして育て上げられたのであらうか。上司小劍氏は『都新聞』五月二十四日『日曜評論』に「彼女の惡魔主義」を論じ、「その責任の大部分は、幼女期、の家庭にある」と云つてゐるのは同感である。ところで幼兒期の家庭の有様はどうであつたのであらうか。上司氏は「相當な生活をしてゐる、と云ふよりも、むしろ全體から見て裕福といふべき商人の家に生れた。末つ子で我儘一杯に育て上げられたと云ふことである。」云々と。

上司氏はどこからこのやうな材料を得られたか知らないが、併しこれだけの材科でその病源（敢て云ふ）を確定することは尙早である。富有な家に生れ我儘に育つてもかうはならない人間も澤山にある。と云つて、全部が素質にあると云はうしてゐるのでない。私はこのやうな學術上

極めて貴重な材料は、これを學界に供して研究せしめることにしては如何であらうかと思ふ。科學者もまた只茫然としてこれを法律家の處置に一任して了はず、心理學上の好試驗材として、それが讓渡を要求するやう、團結して當局に請願でもすることにしたらば、如何であらうか。

附言——女のサディスティックなのが卽ちバンプ(Vampire)で、お定はその一種である。バンプの愛情は、愛憎が同時に出てくる。殺しても自分の物にしやうといふ、エゴイスチックな愛情になる。性慾本能と食本能は、共通點を持つてゐるのである。

お定は不姙症では無いかと私は云つた。女は愛する男により受胎したいと願ふ。然し生理的にそれが出來ない時、そこにどうしても滿ち足りない愛慾の惱みがある。すると、その惱みを醫するために、相手の下腹部を××る。××ると云ふことは、喰込むと云ふことを豫想してゐるので、お定は多分あれを××てしまつたのではなからうかと私は豫想したが、さうはしなかつたが、それは彼女にその願望がなかつたゝめでなく、そこまでは理性を失はなかつたゝめだと解すべきである。外國にはさう云ふ實例があつたと云ふことを、私は高島平三郎氏から聞いた。

また日本現代の某女流詩人（彼女のお定型心理はよくその作品に出てゐる）は「私ならソーセイジにして………」と云つたさうである。

お定型犯罪の流行

大槻憲二

一、お定の卵子本能

血文字お定の事はもう事古りたか。いろんな人がいろんな立場からいろんな事をいつたが、多くは常識的な考へ方ではなかつたか。その後またお定を逆に行つて、老婆の方で×り×られたのなども二三出て來て、お定心理は一層迷宮に入つた觀がある。こゝで彼等の心理を徹底的に分析して御覽に入れるだけの紙面はないが、中心問題だけを少し述べて見よう。

お定式の行動は分析學ではこれをサロメ心理（コムプレクス）またはユーディット心理（コムプレクス）と名付けるのであるが、サロメもユーディットも聖書に出てゐる女の名前で、共に男の首を切取つた女たちである。しかし動機は違つてゐる。サロメは愛する男ヨハネが自分の意に從はぬので、自分を性的に愛してゐる實父、國王ヘロデの威を以てヨハネの首を斬らせてこれに接吻する。ユーディットは自

分の町を攻圍してゐる敵將ホロフェルネスにわが身を捧げて、その後に復讐的に首をとる。サロメは愛が表に出て憎惡がこれを裏付け、ユーデイットの方は憎惡が表に出て愛がそれの裏付けになつてゐる。で、共に愛憎二元の矛盾した心理がこの行動となつてゐることに變りはない。

これをお定と比べると、お定も愛が表に出て憎がその裏付けになつてゐる點ではサロメの方に近いが、しかしサロメは首を斬つたのだし、お定は下の方を×つたので、大分違ふではないかといふ反問が出るが、それは常識的に考へるから違ふやうに思ふので、サロメやユーディットも實は下の方を×りたかつたのであるが、その代償として上の方を斬つたのである。首の内でも鼻が男性の別のところの代償にされる場合がしば／＼ある。丁度、耳が女性のその方の代償にされるのと同じに。昔時、戰爭に耳を斬つて凱旋して來たのは、實に屈服した敵を女性と見なして、別のところを斬る代りにしたものと思はれる。

それにしても、上下がそのやうに倒錯せられるのはをかしいと思はれる人もゐるかも知れないが、しかしお定もあらかじめしきりに吉藏の首を絞めてゐたところを見ると、やはり首斬衝動はあるにはあつたのだ。つひに首を絞めて殺してしまつたので、下腹部においてそれを晝龍

點睛したのだと解せられる。

上下倒錯の心理機制は、これを十分に分析的に證明することは非常に錯雜微妙であるから、も少し手取早く分るためには生物心理學的に、卽ち昆蟲または精子卵子の行動から說明することも出來るだらうと思ふ。卵子が精子を取込む過程がやはりお定式であつて、卵子は精子の頭だけを×××と×××つて、胴體の方はすてゝ顧みないのだ。精子の頭部はつまり頭部でもあり下腹部でもあるのだから、精子から發展した男性は、卵子から發展した女性にとつては、上でも下でも同じやうなものであるといふわけになるのであらう。お定は人間として複細胞生物の原始本能をそのまゝ保存してゐる實に貴重な標本であると思ふ。學者は科學的勇氣と良心とがあるならば、すべからくこれを嚴肅な態度で硏究すべきだらう。

二、二人の老婆の例

それにしても、お定を逆に行つて下腹部を××とられた神奈川縣都筑郡の老婆出口はな(六三)及び芝公園のルンペン三浦みね(五八)の事件はどう說明するかと訊かれるであらう。これは複細

胞生物本能では說明出來ないかも知れない。

はなはなかなか多淫で、名乘り出でるべく餘儀なくされた情夫だけでも八人ほどあるといふから、これでは亭主たるもの尻尾をまいて逃げ出したのも無理もない。我等の分析研究して見たところによると、母性愛と妖婦愛、博愛性と多淫性との間は紙一重の差であるから、彼女は一種の母親型の女で身邊に近付く一切男子を若き燕扱ひにし、子供に還元する魔力を持つてゐたものと思はれる。（我等はこれをクレオパトラ心理または鬼子母心理と名付けてゐる。）それでなくてどうして、六十三歲にもなつて、少くとも八人の情夫を持つことが出來よう。我等は彼女の多淫性を難ずる前に、男性一般の若き燕根性（幼兒性）を憫笑せずには居られない。意識的敎育によつて人間が道德的に進步したなど丶考へてゐる、世の呑氣千萬な敎育家どもの一人よがりをも、序に憫笑しておきたい。

老婆の下腹部を××つたのは女であつたが、男の切る場合も少くない。男の場合だとお定が吉藏のをとつた心理とは、大分に違つて來る。が、かつて大阪の方で類似の罪を犯した男の犯人は、それを自分の頭にかぶつてその場で自殺したといふことである。また、壁面に××とつ

た部分を掲げてそれを摹拜しながら死んだ者もあるといふ。宛も、それがダンテの神曲における地獄門でゝもあるかのやうに……。

頭にかぶるといふことは、一種の願望空想の表現であると解せられる。實際春を描ける戲畫には、しば〱さういふ場面の想像描寫が發見せられる。それは下腹部ではもどかしいので、出來得べくんば頭部を、否、全身を還元せしめたいらしいのだ。還元――左樣、我々はみな、そこから出發して來た者であり、そこゝそは實に故鄕還元への誘惑地であるからだ。失樂園の苦惱と寂寞とを知る者、誰かよくその愛人の聖體に復歸せんとの野望の盛んなるあまり、その聖門を破碎する者の情熱に同病同感の思ひなからんや。たゞ我等常識健全にして、かゝる病態に陷ることを自己に許さゞるのみ。はなの殺害者はやはり老婆で、その動機は三角關係の復讐であつた。兩雄並び立たずとはこの事。その下腹部を切りとつたのは、犯人を男と見せかけようとしての意味もあつたかも知れないが、恨みの焦點はそこにあつたので、元々そこを殺すのが目的であつたのであらう。で、將を殺すためにはまづ馬を射ると云ふ心理がその殺害動機の內にあつたかも知れない。この場合、將と馬とは同體だが……。

附錄 參考記錄

小序

阿部定の犯罪心理を分析診斷するには、必然的に、その生活史全體を調査しなくてはならない。が、さう云ふ細かい調査は只今の我々には、樣々の理由により、遺憾ながら許されてゐない。で、たゞ許された範圍内だけの事を次に試みておいた。

阿部定は昭和十一年にとつて三十一歳であるから、明治卅九年の生れであらう。父の家業は疊屋、始めは相當に裕福であつたが、漸次に沒落の過程を辿つて行つたらしい。彼女の幼年時代に就いては、その幼年時代の友人久保仙子さん及びその母親久美さんが『婦人公論』昭和十一年七月號誌上に於いて詳しく物語つてゐるから、それをこゝに同誌の許可を得て轉戴させて貰ふことにする。處々に編者の分析的解說を附加しておいた。高橋氏稿中にも試みられてはあるが、なほその補ひとして……。

幼年時代

只今では町名が變つて司町と申しますが、震災前には新銀町と申しまして、この界隈は、神

田でも、いちばん神田らしい土地柄でございました。すぐ近所に青物市場は控へてゐるし、堀割の荷上場はあるし、それに住んでゐるものゝ大部分が、大工とか屋根職とか左官屋とか、まあ職人ばかりと申してもよろしいくらゐで、ですから同じ下町でも日本橋とか淺草などゝは、また一風ちがつた氣ッぷのところでございました。喧嘩が多く、物見高くて、それに妙に見榮を張ることが好きで、女の子などには、分不相應に注ぎ込む一方、借金で首が廻らなくなつた擧句、せつかく無理をしいしい習はせた踊りや三味線にそのまゝ物を云はせて藝者にするなんてこともめづらしいことではございません。自分は裏店のやぶれ障子の中にくすぶつてゐるくせに、娘にはきれいな衣裳を着せて遊藝の稽古に通はせ、三月の節句には馬鹿馬鹿しいほど立派な雛段をこしらへて自慢し合ふといつた風で、このへんな氣風は、山の手の方には、おそらく御理解行きますまい。

これは餘談でございますが、つい五六年前、あたしは用事があつて、山の手のあるお邸へ伺つたことがございます。ところが丁度お節句のときだつたものですから、雛段が祭つてあつたので、何氣なくふと見ると、その見すぼらしいこと、お粗末なこと、何とかいふ大きな會社の課長さんで、石の門の立つてゐる立派なお邸のくせに、何てかまはないんだらうと、そのとき

あたしは本當にびつくらしたことでございました。しかし、よく考へて見ると、商賣道具まで質において、お雛様を飾るこちらの方がよつぽどどうかしてゐるわけで、あちらさまの方がずつと本當だと存じます。

お定ちやんの家は、相模屋さんといふ屋號の、江戸時代から四代ものれんのつゞいてゐるふるい疊屋さんで、お定ちやんの育つた頃には、絕へず五六人の職人が忙しさうに働いてゐたものでした。お父さんの阿部重藏といふ人は、なんでも婿養子だつたといふ話ですが、いかにも江戸職人らしい肌合の、酒もあまり飲まず、無駄口もたゝかず、そのかはり子供や弟子達には、かなりきびしい親方でした。たゞ、やはり家附きの娘だつたゞけに、おかみさんには、いくぶん頭が上らなかつたやうです。お母さんといふ人も、派手好きで、すこし口は多かつたものゝ、きちんとした、物堅い、いゝおかみさんでしたよ。しかし、弟子達にはともかく、子供等に對しては、ずいぶんと甘い母親でした。（編者曰、甘い親は子を辛くする。）

お定ちやんの產れた時分には、總領の新太郎さんの放蕩ざかりで、家を出るとか出ないとかしよつちうもめてゐたやうです。もつとも新太郎さんは、その後間もなく、兵隊から歸つて來るとすぐ、古い馴染みの淺草十二階下の矢場の娘と一緒になつて、家を飛び出して、横濱の方

へ世帶をもちましたが――。二番目のおとくさんは埼玉の方へお嫁に行くし、そこで、その次ぎの娘のお千代さんに、同じ疊職人の善作さんといふ人を婿養子にして、のれんをゆづるつもりだつたらしいのですが、このお千代さんといふのが亦小づくりではあつたがすごいやうな美人で、ほかに男のあつたことが、善作さんと一緒になると間もなくバレて、だいぶゴタ〳〵した擧句、無口で人のいゝ善作さんもさすがにイヤ氣がさしたのでせう、正式に人を仲に立てゝ暇をとるといふやうなわけで……重藏さんも子供運が惡かつたのですね。

さう、お千代さんのことでゴテついてゐる頃は、お定ちやんは十二三ぐらゐだつたでせうか。何しろ、あたしのとこにも、お定ちやんと同い年の娘がゐましたし、それに家がすぐ近所でしたから、しよつちう往つたり來たりしてゐましたが、お定ちやんは小さい時から、なか〳〵のきりよう好しでしてね。色は白いし、鼻筋はツンと通つてゐるし、口許はしまつてゐるし、まア强ひて難をいへば、眼許がすこし上り氣味だつた位のもんでせう。相模屋さんのおかみさんも、お定ちやんだけは自慢で、いろんな着物を取り換へ着せ換へては、近所となりを連れて歩いたものです。まつたく目の中へ入れても痛くないやうな可愛がりやうで、あれが欲しいといへば、うんよしよし、これが食べたいといへば、うんよしよしといつた調子で、末ッ娘では

あるし、お千代さんとの間もだいぶ離れてゐましたから、わがまゝ一杯に育てゝゐました。その故か、お定ちやんは、物心つく頃から、氣位が高くて、强情で、利發なことは飛び切り利發な子でしたよ。

大きな男の子から、いぢめられたり、なぐられたりしても、泣きもせず、逃げもせず、涙をいつぱい溜めた目で、くやしさうに、いつまでも相手をにらみつけてゐるやうな强いところがあるかと思ふと、何でもないことでも、ちよつと氣に入らなかつたりすると、キンキンひびく疳高い聲で、いつまでゞも泣いてゐて、お父さんが來やうがお母さんが來やうが、泣きやむことぢやございません。いくらだましてもすかしても手のつけやうがないのです。かといつて、默つて構はずに放つておかうもんなら、きれいな外行きの着物のまんまで、泥ンこの道ばたへ寢轉んでしまつて、足をバタ〳〵やるといふ始末でした。疳が强かつたんでせうね。(**編者曰**、兒童のマゾヒズム的要求に應じてサディズム的取扱ひを適當に與へないと、逆にかう云ふサディズムの形でその要求が表現せられる。兩親の甘かつたと云ふことは、つまりマゾヒスト定に滿足を與へなかつたことを意味したのだ。)

それに人使ひの滅法あらい子で、(**編者曰**、人使ひのあらいと云ふのも、一種のサディズム的

表現であるから、前の我儘と必然的關係がある。）あたしなんかゞ遊びに行くと、きつと「小母ちやん、そこにある傘取つて頂戴な」とか「小母ちやん、下駄直してね」とか、舌もよく廻らぬくせに――さうさう、舌がよく廻らないで思ひ出しましたけど、あの子は、智惠も身體も並外れて早かつたくせに、どういふわけか口だけは非常に遲うござんしたよ。はじめは、啞ぢやないか知らんなんて云はれたくらゐで、四ツ位になつても、まだホンの片言しか喋れませんでした。ところが、その片言で大の大人のあたしたちをコキ使ふんですから、一度や二度は可愛いゝと思つても、あんまり度重なりますと、大人氣ないとは思ひながらも、ついこちらもしやい、くにさはりましてね、と云つて、他人樣の子供を叱るわけにも行かず、仕樣事なし云はれたとほり、いや〳〵ながらも、傘を取つてやつたり、人形の着物を着せてやつたり――早くお母さんが何とか叱つてくれないかと思つて待つてゐるのですが、このお母さんがまた「よその小母ちやんなんかまで使つたりして、なんて定ちやんはおしヤマなんでせう。本當にお前さんおしヤマちやんねえ」なんて、止めるどころか、うれしさうにしてゐるんですからたまりません。

（**編者曰**、甘いと云ふことはサディズムの足りないと云ふことである。外國文學中に定の場合に似た例を求めるならば、シェイクスピアの『じやじや馬馴らし』の女主人公であらう。大槻

著『精神分析雜稿』中「女心の分析」參照。）

もう一つお定ちやんで忘れられないのは、欲しいと思つたものは、誰が何と云はうと、どうしても手に入れなければ承知しない性質をもつてゐたことです。一度などは、あたしんとこの娘の持つてゐる人形を欲しがりましてね。なァに、極くつまらない小さな博多人形でしたが、そいつが滅法氣に入つて、遊びに來る早々、それをつかんでどうしても離さないんです。家の娘は泣き出す、お定ちやんは、その人形を抱いたまゝ白い眼をしてものも云はずに突立つてゐて、しまひには、お母さんまで馳けつけて來て、だましたりすかしたりしましたが、どうしてもウンと申しません。あたしんとこの娘がまた氣狂ひのやうに泣いてゐて、どうにも仕方がありません。やむなくお母さんが小僧さんを走らせて、高い立派なお人形を買つて來てやつたけど、それでも、そんなものは見向きもしないで、うす汚ない博多人形をつかんでゐるのです。その中に、あたしんとこの娘が、新らしく買つて來たお人形を持たせたら默つたので、たうとう交換したことがございましたが、その強情なことゝ申したら、あたしもつくづくあきれてしまひました。（編者曰、人形は、精神分析的研究によると、屢々男性器の代償、象徵となるものであつて、男性器羨望の強い彼女が、友人の男性器代償たる人形を奪つて返さなかつたこと

は偶然でない。この精神は吉藏の下腹部切斷に於いて一層の峻嚴さを以て現れてゐる。）
それに、これもやはり四ツか五ツの時分だつたでせうね、あたしが臺所で洗ひものか何かしてゐると、表戸がガラリと開いて、
「お仙ちやん遊ばない？」
お定ちやんが入つて來ました。丁度娘のお仙は父親と錢湯に行つてゐて留守でしたので、
「お仙はゐないわよ、あとで遊んで頂戴」
と仕事の手をつゞけながら申しますと、
「さうお」と妙に舌足らずのやうな甘つたるい口調で返事をして、そのまゝ靜かになつたので、歸つたものとばかり思つてゐますと、程すぎてから、バタ〳〵と座敷を馳け下りて飛び出したものがあるので、おやと思つてヒョイと見ると、なんとそれがお定ちやんなのです。可笑しいなと思ひながら、手を拭き拭き茶の間へ行つて見ますと、茶ダンスの上に、倅が大切にしておいた銅づくりの小さな犬の置物がありません。前からお定ちやんが非常にほしがつてゐたことを思ひ出し、ハハンと思ひましたが、默つてゐますと、やがて次ぎの日の朝、お定ちやんは返しに來ました。（**編者曰**、分析的研究によると、萬引癖と男性器羨望とは關係があるので、

この犬の置物盜みは、幼い萬引であり、後年の下腹部切斷と關係あることは申すまでもない。）

「あたい、こんなもん欲しくないから返すわ」

ケロリとした調子でした。（編者曰總て萬引は盜むことそれ自身が目的であつて、品物それ自身にはそれほどの執着はないのである。成人の萬引とても、盜んだアトでは返してもいゝと思つてゐるのだが、彼等はそれを返せば罪の告白と同じであることを知つてゐるので、已むなく返さないと云ふ場合が多い。）

——これから先きのことについては、娘のお仙の方がよく知つてゐますよ。學校もずつと一緒でしたし、娘時代になるまで仲よくつき合つてゐましたからね。お仙ですか、お嫁に行つていまでは千葉の田舍の方にゐますよ。何なら、御苦勞でもそこまで訪ねて行つてごらんなさい。學校時代の、あたしなんぞの知らない話がいろ〳〵あるでせうから。

小學校時代

お定ちやんのこと、えゝよく知つてゐますわ、小さい時分から學校を出るまで一緒だつたんですもの。もつとも、どつちかといふと、わたしはお定ちやんの家來筋で、しよつちうおごつ

てもらつたり、かばつて貰つたりしてゐたんですけど。
何しろ、あんな土地柄でございませう、だから男と女の間のことなどについても、小さい時分から何かと見聞きしてゐましたので、小學校へ入る頃には、子供のくせに、今考へてもよくまアと思ふほど、いろんなことを知つてゐたものでした。
そんな風ですから、二年になり三年になる頃には、組の半分ぐらゐは、もうそれぞれ相手をきめて、戀の眞似ごとをしてよろこんでゐました。もつとも、相手と申しましても、子供のことでございますから、別にどうといふことはありませんでしたが、それでも御當人達は至極まじめなもので、見やう見まねで、いつぱしのいろ男いろ女きどりで、男の生徒は「おれの娘」といふし、女の方では「あたいの好い人」などゝいつて、傍からひやかされゝばうれしく、顔を合せるとポッと赤くなつてうつ向いたりしてゐたんですから、考へると、可笑しくもなります。それに、なほ可笑しいことは、その時分すでに戀文をやりとりしてゐたことです。早熟だつたんですね。只今のやうにラヴレターなどゝは申しませんで、「艶文」と云つてゐたものですが、この「艶文」をやりとりしないうちは、「おれの娘」とか「あたいの好い人」とかいふことが出來ない、つまり、一度でも、こちらから艶文をやつて、相手からその返事が來れば、ああ

誰さんはあの娘の好い人だなといふことが、公然とみんなから認めてもらへたわけです。しかし「艶文」とはいふものゝ、十歳かそこらですから戀しいとか愛するとか、そんな言葉は、勿論知りもしませんし、書きもいたしません。

「今夜はお不動様のお緣日だから一緒に行かうよ」とか「この繪本貸して上げるから、人に見せないでお讀みよ」とか、せいぜい思ひ切つたところで、「お前さんの昨日着て來た着物は非常によく似合つた、あれを毎日着て來てくれ」「誰々ちやんが昨日お前さんをいぢめたさうだが、あいつは今日おれがやつつけてやるから安心しな」まアこんなものでした。それも雜記帖の切れつぱしへ書いたものです。（**編者曰**、思春前期の戀心の特質をよく表現してゐる。）

こんな御經驗のない方は、子供のくせにと眉をひそめ、滑稽にも思召すかも知れませんが、正直を申しますと、わたしなんかも、學校へ行くいちばんの樂しみは、自分の机の中にいつしか入つてゐるこの艶文を見ることでした。朝行つて机を開ける時には、胸がドキ〳〵して、手がふるへたものです。あら、お笑ひになつちやいけませんわ。

こんなわけで、お定ちやんにもわたしにも、「好い人」がきまつてゐました。お定ちやんの「好い人」は、仕立屋の息子で、いづれ春吉とか春之助とかいふんでせうが、わたしたちは、

春ちやん春ちやんと呼んでゐました。成績もよく、無口で、おとなしい子で、級長をやつてゐました。

もともと、この春ちやんは、女の方の級長をしてゐる雪ちやんといふ娘と仲よしだつたのですが、あれは多分四年になつたばかりの時だと思ひます。お定ちやんは、ある日のこと、いきなり、きれいな鉛筆と雜記帖を持つて、春ちやんのところへ行つて、

「これ上げるから、あたいの好い人になつてね」

と云つて、その日から、つまりまア雪ちやんから橫取りしてしまつたのでございます。(編者曰、男性器羨望心ある彼女にとつては、級長と云ふ位置はその羨望せられるものの轉位對象となつたわけであらう。こゝでもまた他人のペニスを奪はうと云ふ精神がかう云ふ形で出てゐる。)雪ちやんは、學校の先生の娘で、見るから弱々しく、蒼白い顏をした、おとなしい子でしたから、何事もなくすみましたけど、こゝにおさまらない子が一人出來ました。それは、いまゝでお定ちやんの好い人であつた健坊です。健坊は、わたしたちとは道一つへだてた向側の雜貨屋の倅でしたが、もうずつと以前から、お定ちやんを「おれの娘」にしてゐたのです。學校の往き歸りはもちろんのこと、校庭で遊ぶ時にも、緣日へ行く時にも、身體も大きく、腕力も

強く、近所の餓鬼大將であつた健坊は、かならずお定ちやんの傍を離れずにゐて、お定ちやんをいぢめたり、からかつたりするものがあると、二つや三つ年上の子でも平氣でやつつけてしまふのが常でした。（編者曰昔時の西洋の騎士道そつくりである。分析學では、このやうな態度を救助願望と云ふ。）そして、その度に、お定ちやんから、「あたい、健坊が好きさ」と云はれたり「健ちやん、お禮にこれ上げる」と云はれたりすると、眞赤になつてよろこんでゐました。ところが、級長の春ちやんが、お定ちやんの相手になつてしまつたので、健坊のがつかりするのも無理はありません。（編者曰、健坊が母親へのコムプレクスをお定に寄せてゐた證據で、母に見捨てられた子供の自信喪失と同じ心理的態度である。）

學校の歸り途に、いいいしよんぼりしてゐる健坊の姿が可哀想になつて、

「お定ちやん、どうしてあんた健坊をチヤイしちやつたの」

と訊くと、お定ちやんはしばらく默つてゐましたが、やがて、

「お仙ちやん、これ內證よ、誰にもいつちやいけないことよ、いゝ？　あたい、ほんとは一番にならうと思つたの、そいで去年から一生懸命に勉強したのよ、ところが四年になつて見たら、また十番でせう。くやしいぢやないの、だから、あたい、一番になるのあきらめちやつた

かはりに、男の方の一番の春坊を好い人にするの」（編者曰、男性器羨望は劣等感であり、その劣等感への補償は容貌、服裝、學業等の優秀に依つてなし遂げられようとする。この羨望の強く根強い彼女はこれ等總ての諸條件に於いてその優秀性を保證しようと思つたのだが、その内の一つ――學業――に於いて絶望である時、それを獲得してゐるものを獲得することに依つてその補償をなさんとする。）

「だつて健坊はどうするの」

「うゝん、健坊は大丈夫よ、雪ちやんと仲よくなるわよ」

わたしたちが、自分の噂をしてゐることを感づいたらしく、わたしたちの方を盜み見してゐた健坊が、この時何を思つたか、突然驅け出しました。あッ、なぐりに來る、と思つて用心してゐると、わたしたちの傍を見向きもせずに驅け拔け、ドン〳〵自分の家へ走つて行つてしまひました。

「いやな奴」

と云つて、左の肩をちよつとゆすり上げたその時のお定ちやんを、わたしは今でも憶えてゐます。

その次ぎの日から、いくら暴れん坊の健ちやんでも面と向つてお定ちやんに食つてかゝる勇氣はなかつたものと見え、江戸の仇を長崎といふわけで、ちよい〳〵と級長の春ちやんにいぢわるをはじめました。それも、お定ちやんのゐるところでは、決してやらないで（編者曰、彼にとつてはお定は母の代償であるので、母は良心の象徵であるので、良心に恥づかしいやうなことは、彼女の前では出來ないのだ。）廊下とか便所の入口とか校庭とかで、理由もなく頭をなぐつたり、帽子をもぎとつて泥の中へ捨てゝしまつたり、いきなり後から突きとばしたり、春ちやんはよく泣かされてゐました。

それからしばらくたつたころのことです。日曜日のことで、晝食をたべるとすぐ、わたしは姉と一緒に近所の錢湯に行きました。そこへ偶然にお定ちやんが入つて來たのです。

「あら、めづらしいわね、お定ちやんが錢湯に來るなんて――」

「なぜ」

「だつて、あんたんちお風呂があるんぢやないの」

「あるわ、あるけど、時々錢湯にも來るの」

「まあ、どうして」

と姉が訊くと、

「だつて、あたい、家の風呂は、口開けでないと入らないことにしてゐるのよ。一人でも小僧なんか先きに入ると、何だか汚ないやうな氣がして、そんな時は錢湯へ來るの」（編者曰、彼女の男性コムプレクスの表れである、男性器羨望は自分を男性であると想像すると云ふ形ででも表れる。その場合に、風呂は女性となり、初風呂は處女の意味をとる。汚いと云ふが、汚いことにかけては錢湯の方が遙に汚いのに、それには彼女は氣づいてゐない。何となれば、この言葉は彼女の意識語でなく、無意識語だから。）

「ずゐぶんぜいたくね」

そんな話をしながら、ほかに客のない氣安さから、湯をはねかしツこしたり、泳いだりして遊んでゐる中に、板一枚へだてた男湯の方にも、子供が澤山入つてゐて、しきりとキヤツキヤツと騒いでゐましたが、誰かゞいたづらに飛ばしたらしい水沫が、境の板を越して、流し場へゐた姉の頭から背中にかゝりました。姉はキヤツと云つて飛び上る、向ふでは面白がつて、ますく〵さわぎ立てる、さうして、お互ひに惡口を投げ合つたり水を飛ばし合つたりしてゐる中に、どういふ言葉のやりとりからか、向側の一人が、

「てやがんでえ、女なんか、いくら威張つたつて、男の方へ入ることは出來めえ、やァい！」
その聲が、どうも健坊らしいのです「健坊よ」とお定ちゃんは眞劍な顔で、わたしの耳に囁きました、そして大きな聲で「入つたらどうするツ！」と、どなり返しました。
「手を突いてあやまつて見せらァ」
「きつとか」
「きつとだとも！　その上にしゃばん水のんで見せらァ」
「ようし、きつとだね！」
いふが早いか、お定ちゃんは、男湯と女湯の間についてゐる潜り戸をあけにかゝりました。その頃の錢湯は脱衣場を通らずに往き來ができるやうに小さな潜り戸がついてゐたのです。驚いたのは、わたしと姉ばかりではありません。番臺の小母さんまでがあわてゝ飛んで來て留めやうとしましたが、お定ちゃんはどうしてもきゝません。「くせになるから小母さん放つといてよ」とまるで、大人のやうなことをいひながら、裸のまゝ、するりと男湯の方へ入つて行きました。（**編者曰**、別項高橋氏の解説を參照ありたし。）
私と姉は、のぞくのもきまりが悪いし、見られるのも恥づかしいし、境の板のところにぴつ

たりとくつついて、じつと様子を伺つてゐました。

さすがに男湯の暴れん坊たちも、しいんと靜まり返つてしまひました。やがてジャブンといふ湯の音「さァ入つたよ、あやまつておくれ」お定ちゃんの疳高い聲がひゞきました。つゞいて「さアお飲み、約束だから、しやぼん水を飲んどくれ！」

飲んだのか飲まないのか、しばらく何の物音もしませんでしだが、やがて「健坊！　お前みたいな卑怯な奴、あたい大嫌ひさ！」といひすてゝお定ちゃんはまたくゞり戸から姿をあらはしました。こゝろもち頬を蒼くして、眉をつり上げたお定ちゃんの顏が、わたしにはとても美しく見えました。そして、何だかわたしたちまでが氣壓されたやうな氣持で、しばらくボンヤリと言葉を掛けることさへ出來ませんでした。

春ちゃんとお定ちゃんのことについては、もう一つ思ひ出すことがございます。それは、たしか五年の時だつたと憶えてゐますが、ある朝わたしがいつものやうに「お定ちゃん、行きませう」と誘ひに行きますと「ハァイ」と元氣よく出て來たのですが、見るとわたしは思はずポカンとしてしまひました。といふのは、その日のお定ちゃんは見事な桃割れにふつくらと結ひ上げて、ちりめんか何かの大柄なきれいな着物に木履をはいて、それはそれはまるで眩しいや

うな姿をしてゐるのです。身體の柄は大きいし、それに色は白いし、髪の毛もたつぷりとあつて、かうして見ると、まるでもう立派な一人前の娘です。その頃、學校へ行く位の子供はたいていお下げかお稚子髷にきまつてゐたものでした。

わたしは、何だかいつも遊んでゐるお定ちやんとはまるで別な人のやうに見えて仕方がありませんでした。そして、うらやましくてボンヤリと見惚れてゐると「何見てんのさ、行かうよ」と云つて歩き出しながら、ふと氣がつくと、お定ちやんのお母さんが、勝手口から顏を出してうれしさうにお定ちやんの後姿を見送つてゐました。それから學校へ行く途中も學校へ行つてからも、わたしはまるで自分が桃割れに結つて着飾つたかのやうに、ひとりでテレたり得意になつたりしながら、お定ちやんと肩を並べてゐました。すると、可笑しいのは春ちやんです。いつもなら「好い人」同志は、必らず教科書を取り換へたり、鉛筆を交換したりするのがおきまりなのに、その日にかぎつて、妙にモヂ〳〵してたゞ遠くから、顏を眞赤にして、まぶしさうにチラと盜み見るだけで、お定ちやんの傍へ寄りつかないのです。

「春ちやんたら意氣地なしねえ　あたいがおめかしして來たもんだからきまり惡がつてるのよ」

とお定ちやんはわたしに囁きました。そしてわざとかんざしをチヤラ〳〵させながら、春ちやんの傍をすまして通りすぎたりしてゐました。（編者曰、これも一種のサディズムの表れである。）

お定ちやんのお父さんは、昔氣質の職人でしたから、何かといふとすぐに打つたり折檻したり、ずいぶん手荒な叱りやうをしたやうでしたけど、それがお定ちやんには、ちつともそれほど叱られてゐると感じないやうでした。

ある時、これも五年の秋頃だつたと思ひますが、いつものやうに肩をならべて學校へ行く途中で、曲り角のところまで來ると、お定ちやんは突然立ち止つて、

「あたい、今日は學校よすわ」

といひ出したのです。「そいでどうするの」とわたしが訊ねると、「兩國へ行くの、見世物を見に——」と云つて學校と反對の方へ曲つて歩いて行きました。その當時、何だつたかは忘れましたが、兩國に評判の見世物がかゝつてゐて、わたしの組でも二人ばかり見て來たものがあつて、得意になつて吹聽してゐたのを聞いてゐたものですから、わたしたちも見たがつて、毎日〳〵親達にせがんでゐたものです。しかし、お定ちやんのところでもわたしの家でも、なか

〱行かしてくれませんでした。それを、お定ちやんは、今一人で行くといふのです。わたしも、ぢやあたいも一緒に連れてつて、とよつぽど云はうかと思ひましたが、あとで親達から叱られる怖さが先きに立ち、それにお定ちやんのその時の顏が、何だか怒つてゐるやうな、妙にとりつく島のない態度だつたものですから、仕方なしに、たゞ羨しく、お定ちやんの心持右肩の怒つた後姿が電車通りに消えるまで見送つてゐました。（**編者曰**、禁ぜられてゐることであるが故に愈々益々行つて見たくなるのが犯罪者の心理である。この心理起源は複雜であるが、一つには兩親が甘かつたせいでもある。極幼時に禁斷の威力を、服從の快感を敎へこまれ損ふと反抗の快感のみを知つて服從の快感を知らなくなるやうである）

しかし、その日は、何だか氣になつてなりませんでしたので、學校から歸るとすぐお定ちやんの家へ行きました。ところがお定ちやんはまだ歸つてゐないのです。もしかしたら、人淺ひにでもさらはれたのではあるまいかなどゝ考へて心配になつて來たので、家のお母さんに、お定ちやんが今日學校を休んで兩國へ行つたことを話しました。すると、お母さんは、すぐにお定ちやんの家に行つて云ひつけたらしくて、夕方少し暗くなつてから、お定ちやんの家に行つて見ますと、仕事をしまつてガランとした店先きの仕事場の隅ッこに、お定ちやんは後手に縛

りつけられて轉がつてゐるのです。しばらく覗いてゐましたが、いつまでたつても、目を閉ぢたまゝ、ぢつと身動きもしないので、私は死んでゐるのではないかと思ひました。奥の方からは、夕飯でも食べてゐるらしく、職人達の賑やかなざわめきが聞えて來ました。わたしが、怖々と近づいて、小聲で、「お定ちやん」と呼んで見ると、お定ちやんは目を開いて、ニツコリときまり惡さうに笑ひました。そして大儀さうに半身をもたげながら、「あんた、すまないけどその庖丁取つてよ」

といふのです。それが、いつもの否應いはさぬやうな口調だつたのと、それにお定ちやんをこんな目に遭はせたのは自分が云ひ付けたからだといふ氣持もあつたものですから、拒むことも出來ず、傍の庖丁をそつと取つて渡しました。するとお定ちやんは、「お仙ちやんは早く外へ出てゐて」と云つてわたしを外へ出しておいて、ゴシ〳〵と繩を切りはじめました。そして、やがて足音を忍ばせて外へ出て來ると、

「いゝ氣味！」

と云つて、クスリと肩をすくめて笑ひました。「でも、お定ちやん、どうするの」と、わたしは、わがことのやうにオロ〳〵してしまひました。

「お仙ちやん、心配することないわよ、あたいこれから本郷の叔母さんちへ行つて泊まつて來るの」

と云つて、わたしの家の前まで送つて來て、そこでさようならをすると、その頃習ひはじめた三味線の調子をチリトンシヤンなどゝ口と手でとりながら、あかるい通りの方へ出て行きました。まあ、何てのんきな人！ わたしは一人で一生懸命に心配してゐたのが馬鹿〳〵しくつて腹が立つてなりませんでした。

不良少女時代

その後、わたしは六年で學校を下つてお針の稽古に通ふやうになりましたし、お定ちやんはそのまゝ高等科へすゝみましたから、今までのやうに朝から晩までつながつてゐるやうなことはなくなりましたけど、それでも、お稽古の早くすんだ日とか半ドンとかには、誘ひ合して一緒に活動を見に行つたり、蜜豆を奢つてもらつたり、おしるこ屋ののれんをくゞつたり、暇さへあれば二人で遊んで歩きました。

魚屋の鐵ちやんといふ若衆と問題を起したのは、その頃ぢやなかつたかしら……それが因で

お定ちやんは學校を退くことになつたんですから。お定ちやんが高等科へ入つた年の夏の終りごろにちがひありません。

その頃、お定ちやんの家の隣りが小さな駄菓子屋で、夏になると氷ののれんを下げたりする店でしたが、そこの緣臺がつまりまア町内の若衆連の溜りみたいになつてゐまして、五六人はしよつちうゴロ〳〵してゐて、近所の娘達の品定めをしたり、前を通るお稽古がへりの娘ッ子をからかつたりしてゐたものです

學校から歸つて包みを放り出すとすぐ、お母さんに手傳つてもらつて、上から下まですつかり袂の長い着物に着換へ、白粉紅できれいにお化粧して、時には髮まで結ひかへて、踊りの稽古に通ふお定ちやんの姿が、何しろ出るにも入るにも一度は必らずその駄菓子屋の前を通らなければならないんですから、そのゴロンボ連の評判にならない筈はございません。われこそとばかり、附文をするものがあつたり、内内で小當りに當つて見るものがあつたり、根氣よく後を追ひかけたり、でも、お定ちやんは一向構ひつけなかつた樣子でした。中に一人、屋根屋の職人で忠公といふ奴などは、これはもつともすこし足りない男でしたが、あんまりしつこく云ひ寄るので、お不動樣の緣日の晩、人の出盛る露店の前で、多分手を握るかお尻をつゝつくか

したのでせう。お定ちやんが怒つて、ピシヤリと横ツ面を撲りとばしたことなども、ございました。

ところが、そのうちに、どうしたわけか、前に申しました魚屋の鐵ちやんとお定ちやんの仲が臭いといふ噂がパッとひろがりました。鐵ちやんは、須田町の近くの魚屋の伜で、十八か九位だつたでせうか、角刈りがよく似合ふいなせないゝ若衆でした。やはり駄菓子屋に集る常連の一人だつたのです。すると間もなくその噂を裏書きするやうに、お定ちやんは學校をやめて家へ引込んでしまひました。そしてわたしがお稽古のかへりなどに寄つて見ても、小父さんも小母さんも不機嫌な顔で「お定は親戚へ行つてゐますよ」と云つて、何故か會はしてもくれなければ、行先きも敎へてくれませんでした。しかし、その後十日ほどしてから、お定ちやんは再び姿をあらはして、わたしの行つてゐるところとは別の今川橋の方のお師匠さんのところへお針に通ふやうになりましたので、早速會つて話をしますと、親戚へ行つたなんてのは嘘で、二階にかんきんされてゐたのだといふことでした。その時お定ちやんは、非常にお母さんやお父さんを恨んでゐましたが、その憤慨ついでに、こんなことまで申しました。

「お仙ちやん、くやしいぢやないの、お父ッさんもおッ母さんも、學校の先生まで　あたい

のことを、鐵公と何かあつたんだらうつて、さういふのよ。いくらさうぢやないつて云ひ張つても、身體を見りやわかる、強情な奴だつて、てんできいてくんないの。ほんとに、あたい正直いふけど、そんなことないのよ、たゞ鐵公と一緒に活動見に行つたり、おそば屋へ行つたりしたゞけなのよ。それなのに、あんなことするなんて――馬鹿にしてゐるわね」

わたしは、この時はじめてお定ちやんの涙を見たやうな氣がしました。わたしは何と云つていゝかわからないので、たゞ默つてうなづきますと、お定ちやんは、

「あたい、だから、本當にそんなこと、してやらうかしら」

と云つて、疳性らしく唇をかんだその顏を、わたしは今でも思ひ出します。（編者曰、彼女は本當はそれをやりたかつたのだが、それを自己に禁制する良心の働きは當人に存在してゐたのだ。併し實際には何もしなかつたことに就いて兩親から必要以上に――彼女には少くとも必要以上と思はれたらしい――叱られたので、その埋合せに、これだけ叱られたのなら、少々惡い事をしてもいゝ權利が殘つたと云ふ無意識論理がそこに働くのである。）

それから、たしか一ヶ月とはたゝない頃、お針の稽古先きのお師匠さんの家にゐた髪の毛の長い學生と一緒に姿を消して大騷ぎをしたことがございます。その時はそれでも三日目に連れ

戻されて、ひどく折檻され、今度は本當に田舍の親戚（一番上の姉さんの嫁いだ埼玉縣の坂戸といふ町）にあづけられ、この事件で、お定ちやんの評判はますます高くなつて、すつかり不良といふことになつてしまひました。

「今度歸つて來ても、お定ちやんと遊ぶんぢやないよ」と、わたしなども、懇々と母親から云ひきかされたものです。

しかし、翌る年の正月には、ヒヨコツトわたしの家へやつて來て「お正月ぐらゐ東京にゐたいわよ」なんて、とても朗かさうに笑つてゐました。そして、その後は田舍に行く樣子もなく、といつてお稽古に通ふでもなく、しばらくブラ〳〵してゐましたが、外出を禁められてゐるし、わたしもお定ちやんと遊ぶことを禁められてゐたものですから、もう以前のやうに一緒に活動に行つたり、おしるこ屋へ行つたりすることも出來なくなりました。

すると、節分の晩のこと、わたしが母や姉と一緒に明神樣へ豆まきを見に行つて、かなりおそくなつてから歸つて來て、お定ちやんの家の前を通りかゝりますと、勝手口のくゞり戸の外にお定ちやんがボツンと立つてゐるのです。

「おや、お定ちやんぢやないかい」と母が聲をかけますと、

「今晩は」とお定ちやんは、すこしきまり惡さうに笑ひながら頭を下げました。
「お前さん、どうしてそんなとこに突立つてゐるのさ」と母がづけづけ申しますと、
「入らうかどうしやうかと思つてるとこなの」とかうなのです。
「おや、どうして？」
「だつてお父さんが入れてくれないつもりらしいのよ、小母さん」
「そんなお前さんバヵなことが……」
「いえ、さうなのよ。外へ出ちやいけないつてのに、あたい今夜明神樣へなんか行つて來たもんで、そいで怒つてるんでしよ。さつきから二度も三度も開けて頂戴といつてゐるのに知らんふりをしてるのよ」
「小父さんたち、氣がつかないんぢやないかしら」
とわたしが申しますと、
「ううん、知つてるのよ。今もわざ〳〵お勝手まで來てエヘンなんてセキ拂ひしてつたんですもの」
「ぢやお定ちやん、お前さんこの娘達と一緒に一足先きにあたしんちへ行つて待つといで、

あたしお父ッさんによく話してつてあげるから……」

「いゝの、小母さん、放つといて」

と云つて、それぢやいつそ家へ來て泊んなさい、明朝になつてからあたしが一緒に行つてあやまつて上げるから、と口をすつぱくしてすすめる母や姉の言葉をふり切つて、

「今夜は本郷の叔母さんとこへ泊つて、明日は田舍へ行くからつて、明日もしうちのお父ッさんかおッ母さんに逢つたら、そ云つておいて頂戴な」と云つて、寒さうに首をちゞめながら向ふの角を曲つて行つてしまひました。

――これは後になつてからきいたことですが、その晩お定ちやんはわたし達に別れるとまた明神樣へ引返して、人波にもまれてゐるうちに、そこで一年ほど前にさかんにお定ちやんのあとを尾け廻してゐた神田の不良で、いまでは淺草の方に顏を賣つてゐる折井といふ男に會ひ、折井に誘はれるまゝ淺草へ行つて、何とかいふ不良團に引きこまれたのださうです。(編者曰、これこそ彼女の無意識の思ふ壺であつたのだ。自分は行く意志はなかつたのだが、兩親が追出したから、已むなくかうなつたと云ふ、自分の意志を他人のせいにするのは、無意識心理の常套手段である。)

「あの時、無理にも家へつれて來て泊めてあげたら、お定ちやんも不良なんぞにならなかつたかも知れないねえ」と母なぞはよく後になつてから申してをりました。

その後、淺草から連れもどされて、お父ツさんの出入り先きの、芝の聖坂にある實業家のお邸へ行儀見習ひに上つたところが、やはり二ケ月でも三ケ月でも不良なんぞしてゐるとクセが拔けないんでございませうね。そこのお嬢さんの眞珠の指輪と羽二重の帶と御召セルを持ち出して警察につかまり、なんでも錦町署に留められてゐたといふことでございました。横濱へ行つて藝者になつたといふのは、それからすぐのことぢやございませんか。お父ツさんの方も、お氣の毒なことにその頃はすつかり左前になつてしまひましてね。新太郎さんはぐれるし、お定ちやんは警察の御厄介になるといふわけで、まアあんな堅い人ですから、世間體も考へたんでございませうか、お定ちやんが警察から歸された頃には、店をたゝんで埼玉の田舍へ引込んでしまひました。

——新聞で今度の事件を知りました時には、まア、あのお定ちやんが……と一時はびつくりもし、意外にも思ひましたけど、よく考へて見ますと、かうなつたから申すわけではございま

せんが、やはりどつかにこんなことも仕兼ねないやうなところがあつたやうに思はれてなりません。

× × ×

兩女の思出話はこゝできれてゐるが、お定の幼少時からの不逞な心理はよく表れてゐて、好個の參考資料である。宛も多少の分析心得でもあるかの如くに、誠に興味あるエピソードの多くが報告せられてゐる。

最後に彼女の犯行、及びその後の成行の時間的經過を表示して本書の終りとする。

事件の時間的表示

◆五月十八日午前五時頃?兇行

◆同午前八時半　付近の三業自動車で待合「まさき」を逃走。

◆午前九時頃　新宿伊勢丹脇ゴー・ストップ付近で下車。

◆午前十時頃　車を變へて下谷區上野町二の十小野古着店で鶉お召單衣、鱗模樣着物に變裝。

◆午前十時半頃　呼出した大宮校長と神田須田町「万惣」付近で落合ひブラ〲と歩き出し。

◆午前十一時半頃　京橋そば屋「巴屋」で休み、女は天丼一杯を喰ひ一時間後連立つて出る。
◆午後零時頃　大宮校長と共に豊島區西巣鴨二の一九八五「みどり屋」旅館に現れ、入浴後飲酒約二時間にして出る。
◆午後二時半頃　本郷區壹岐坂迄圓タクを飛ばし、同所で大宮校長が大森「夢の里」へ行かうと誘つたのを何故か斷り「大變お世話になりました」と變つた挨拶をして別れる。校長はその儘校長會議へ――。
◆午後三時頃　芝區新橋古着店「あづまや」に現はれ、黑地茶竪縞同色横段のセル着物、鼠色縮織名古屋帶（金線直徑一寸五分の菊花模樣入り）羽二重空色絞り帶上げ等を約十圓求め、下谷で買つた着物は風呂敷包として再び變裝をして圓タクで逃走。
◆淺草區新谷町八、上州屋武田なつ方に、午後七時半頃投宿。
◆翌十九日午前十時頃、宿料一圓、祝儀一圓を支拂つて宿を出で、銀座をぶらつき。
◆十九日夕方になつて、品川驛附近品川館に投宿。
◆二十日夜、高輪署の安藤刑事部長に依つて、品川館にて逮捕。
◆廿一日、午後一時から浦川捜査課長、吉田主任警部等に依り調査開始。

◆十月二日豫審終結、殺人及び死體損壞罪との罪名の下に檢事局に送局せらる。◆十一月廿五日、第一回公判、東京刑事地方裁判所にて細谷裁判長、酒井檢事係の下に開廷。◆第二回公判は十二月八日。◆十二月廿一日、實刑六年と決定。

參考文獻表

▼『精神分析』昭和八年十月號「犯罪心理」號。——「犯罪者の心理」（長谷川）、「轉向心理論」（大槻）、「犯罪心と宗敎心」（矢部）「犯罪分析文獻」（高水）等の記事あり。

▼『精神分析』昭和十一年三、四月號「母性と妖婦」號。——「母性の長子憎惡」（長崎）「妖婦への感傷愛」（高橋）「妖婦の近代性と社會性」（北山）、「母性愛と妖婦愛」（大槻）などの論稿あり。

▼『戀愛性慾の心理とその分析處置法』（大槻憲二著）——「第三章、變態性慾の心理」に參考すべき個所多し。

▼『精神分析・社會生活法』大槻憲二著——犯罪心理と病的良心との關係に就いて、言及せるところ多し。

▼『精神分析雜稿』大槻憲二著——戀愛と救助願望と妖婦心理との關係について詳論せる長編を卷頭に掲ぐ。

▼『遠近精神分析觀』長谷川誠也著——「安達原の精神分析」に於いて母性妖婦の心理分析を試む。

——完——

本研究所出版書目

『精神分析』隔月刊行誌　定價五十錢送料共

合本『精神分析』第一卷上及下（昭和八年度）　品切

合本『精神分析』第二卷上及下（昭和九年度）　上下共各々二圓五十錢・送料共

合本『精神分析』第三卷（昭和十年度）　全一册　三圓・送料十五錢

合本『精神分析』第四卷（昭年十一年度）　全一册　三圓・送料十五錢

戀愛性慾の心理とその分析處置法　大槻憲二著　二圓二十錢　送料十四錢

精神分析概論　大槻憲二著　八十錢　送料六錢

理想の家族（カサリン・マンスフイールド短篇集）　岩倉具榮譯　一圓八十錢送料共

ドストイェフスキーの精神分析　平塚義角譯　一圓　送料六錢

阿部定の精神分析的診斷　本研究所編　五十錢　送料共

著者検印

昭和十二年一月十日初版印刷
同　　十五日同發行
昭和十二年二月一日再版印刷
同　　六日同發行

『阿部定の精神分析的診斷』

定價金五十錢

著者　大槻憲二
東京市本郷區駒込動坂町三二七

發行者　大槻憲二
東京市精神分析學研究所出版部代表

印刷者　大森清一
東京市本郷區根津西須賀町九

印刷所　大森印刷所

發行所　東京精神分析學研究所出版部
東京市本郷區駒込動坂町三二七
振替東京七八八一七番

取次店
栗田書店　大東館　東京堂
東海堂　北隆館　福音社